

SF ダイムノヴェル—テクノロジー，冒険，帝国主義

山口ヨシ子

I. スティームマン誕生

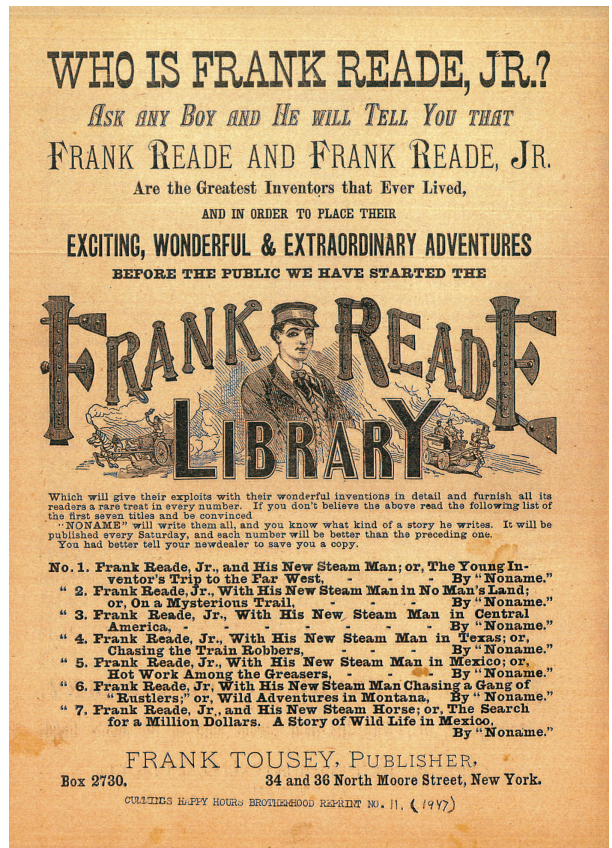
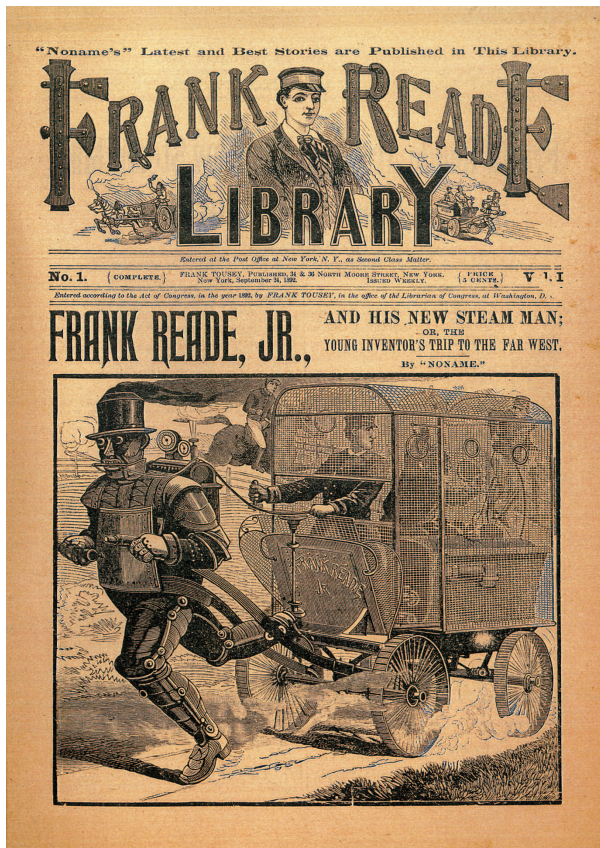
A. 世界最初の SF シリーズ

ダイムノヴェルは、SF、すなわちサイエンス・フィクションの歴史においても重要な一角を占めている。フランク・トージ社が 1891 年から 98 年にかけて出版した 191 冊に及ぶ「フランク・リード・ライブラリー」は、シリーズのかたちで出版された最初のサイエンス・フィクションとされている (Williams 282)。おもには、「ノーネーム」という出版社用ペンネームのもと、のちに「アメリカのジュール・ヴェルヌ」¹ と呼ばれるルイ・P・セナレンズが書いたものであるが、その内容は一つのパターンを示している。フランク・リードやフランク・リード・ジュニアなる「史上最高の発明家」が、自ら作りだした「スティームマン (蒸気機関人間)」や「電気飛行船」など現実社会ではあり得ないような「すばらしい発明品」を駆使して、アメリカ西部や世界各国へ「スリルに満ちた、驚くべき、類のない冒険旅行」にでかけていくというものである²。

見知らぬ遠隔地での白人 (WASP = ホワイト、アングロ・サクソン、プロテスタント) の利益追求とネイティブ・アメリカンをはじめとする先住民との戦いが冒険とみなされ、未来に達成され得るような目覚ましいテクノロジーは、人種偏見にもとづく帝国主義をつらぬくための有益な手段として利用されている。ダイムノヴェルのかたちで出版されたサイエンス・フィクション、SF ダイムノヴェルは、とくに白人労働者階級の少年や若い大人向けの読物として人気を得るようになるが、科学技術の力は、先住民を白人の敵として殺戮し、白人の権力拡大をはかるために使われているのである。

このような内容は、当然ながら、19 世紀後半から 20 世紀にかけてのアメリカの国家政策と連動している。合衆国の膨張を「明白なる使命」とみなして西部侵略を続け、19 世紀末にフロンティアが消滅すると、米西戦争やハワイ併合など、帝国主義的な領土拡大や覇権主義を推進するようになるアメリカの国家としての姿勢である。しかも、新しい発明品を生みだし侵略的な冒険旅行にでかける発明家がつねに白人男性で、それがおもに少年向けに大量に生産され広く読まれたことは、SF ダイムノヴェルがアメリカ国家 = 白人男性という図式の強化を推進していたことになる。アメリカが社会制度として白人男性を筆頭におき、その下位に女性、先住民、アフリカ系アメリカ人などをおく図式を強化するのに、SF ダイムノヴェルが大きな役割を果たしていたということである。

トージ社は、フランク・リード親子が登場する「フランク・リード・ライブラリー」の売れゆきが落ちると、同じ「ノーネーム」を作者とする「ジャック・ライト」シリーズに力を入れ、1891 年から 1904 年の間に 120 編もの作品を出版している (Clute, Nicholls 335, Cox 289)。他のダイムノヴェル出版社も、トージ社と競うようにサイエンス・フィクションを出版するようになり、たとえば、ストリート・スミス社は、1891 年には、フィリップ・リードをおもな作者とする「トム・エジソン・ジュニア」やロバート・ツームズによる「エレクトリック・ボブ」などのシリーズを開始している (Clute,



「フランク・リード・ライブラリー」第1号の表紙（左）とその裏表紙（右）（筆者所蔵）

Nicholls 335)。

1926年には、世界最初のSF専門誌『アメージング・ストーリーズ』が創刊され、その初代編集長ヒューゴ・ガーンズバックは、「科学的事実と予言的ヴィジョンをあわせもつ魅力あるロマンス」を「サイエンティ・フィクション (scientifiction)」と呼び、サイエンス・フィクションという用語が普及するもとを作った (Ashley 23, アシュリー 67)。安いパルプ紙に印刷されたこのパルプ・フィクションのSF専門誌は、その後20世紀とともに長い歴史を刻むことになる。

SFダイムノヴェルは、このようなSF専門誌が人気を得る以前のアメリカにおいて、「すばらしい」科学技術をもって好戦的愛国主義に徹する発明家などを描いて多くの読者を獲得し、アメリカを白人男性中心化する図式を強化するとともに、現代以前のアメリカの発明精神を反映し、のちのサイエンス・フィクションの原型を示している (Bleiler <1> xvi)。19世紀前半に「ハンス・プファールの無類の冒険」(1835)や「メロンタ・タウタ」(1849)などによっていち早く「未来に起こること」を書いたエドガー・アラン・ポーなどとともに、アメリカにおけるサイエンス・フィクションの初期の歴史を形成しているのである (野田 9)。

B. SFダイムノヴェルの始祖

「フランク・リード・ライブラリー」は、週刊、または隔週刊で定期的な出版されたことで、たしかに「世界最初のサイエンス・フィクション定期刊行物」といわれているが (Guinan 裏表紙, Ashley 15)、じっさいには、このシリーズがSFダイムノヴェルの元祖というわけではない。その起源は、1868年にエドワード・S・エリスがビードル社から出版した『大草原のスティームマン』までさかのぼ

ることができる。この作品は、「アメリカン・ノヴェル」シリーズの第45号として10セントで出版されたのを皮切りに、「ハーフタイム・ライブラリー」の第271号に編入されるなど、タイトルに「巨大なるハンター」と加えつつ、1904年までに6度にわたって再版されている (Moskowitz 111)。

1860年に『セス・ジョーンズ フロンティアの捕虜』をヒットさせてタイムノヴェルの盛運に寄与したエリスであったが、その8年後、巨大なる蒸気機関人間を創造して西部に送り込み、アメリカにおける少年向け空想科学小説の「生みの親」となったのである (Bleiler <2> 220)。エリスは、E・F・ブライラーの『初期のサイエンス・フィクション』によれば、20世紀初頭より根強い人気を博しているエドワード・ストレートマイヤーによる少年向けSF、「トム・スウィフト」シリーズから現在にいたる長いサイエンス・フィクションの歴史の始祖ということになる (220)。

エリスがスチームマンを創造したのは、おそらくはニュージャージー州ニューワークのザドック・P・デディリックがじっさいに作った「ほんもののスチームマン」の影響があったと思われる (Cox 234)。これは、『ニューワーク・アドヴァタイザー』紙の記事によれば、蒸気で動く人間のかたちをしたロボットで、直立する、歩く、走るなど、人間の重要な運動機能を指示に従って果たし、馬3頭分の重さを引く力があったといわれる (“Zadoc” 8)。身長が約2メートル36センチ、体重約227キロで、蒸気は胴体の部分で発生させ、きわめて自然な歩き方ができたという (8)。

22歳の若者が生み出したこの新奇な発明品に関する記事は、1868年1月8日付けの『アドヴァタイザー』紙に掲載されているが、その約半年後にはエリスの『大草原のスチームマン』が出版されている。デディリック同様ニュージャージー州に住んでいたエリスが、若き発明家で作った蒸気機関人間の記事に触発されてスチームマンの物語を書いた可能性はきわめて高い。1869年には大陸横断鉄道が完成し、大西洋と太平洋は蒸気機関車で結ばれて西部開拓を促進することになるが、その1年前に、デディリックは蒸気機関車同様の仕組みで動く蒸気機関人間の創作に挑み、エリスはそれをフィクションに仕立てて西部に送ったことになる。

C. エジソンとSFタイムノヴェル

19世紀後半のアメリカにおけるSFタイムノヴェルの興隆は、「アメリカの未来」の象徴であった発明家トマス・アルヴァ・エジソンの活躍と密接にかかわっている。この著名な発明家は、1868年に電気投票記録機を発明したのを皮切りに、小さい発明品は10日ごとに、大きな発明品も半年ごとに生みだしていた (Boostin 528)。1876年には「発明工場」をニュージャージー州メンローパークに作り、翌77年には蓄音器を発明して「アメリカの人気魔術師」の異名をとるようになる (Brown 360)。

エジソンは、発明を「社会的な製品、より正確には市場で売れる商品」とみなしていたが、これによって彼の発明に対する考えが明確に「アメリカ的特徴」をもつことになった (Boostin 528)。「社会的発明」という概念がアメリカ人の想像力をとらえ、現代以前のアメリカの発明に対する考え方を反映することになるのである。1900年以前のアメリカの農家の納屋には、馬を使わない乗物や空飛ぶ乗物に対する夢がしまい込まれていたといわれるが (Bleiler <1> xiv)、「発明物語 (invention story)」とも呼ばれたSFタイムノヴェルは、この夢を共有することになる。実社会で役に立つ新製品を次々と発明していたエジソンは、まさに19世紀後半の「発明の時代」を体現するような人物であり、その活躍は、SFタイムノヴェルの人気と連動していたといえよう。

じっさい、ジョン・クルートは、『サイエンス・フィクション百科事典』で頭脳明晰な若い発明家やその発明品についての物語を「エジソンもの (Edisonade)」と名づけて定義を試みている (386)。「アメリカの若い男性発明家の主人公が、厳しい状況を脱するために自らの発明の才を用い、外敵から身を守る物語」(386)というのがその定義である。ダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソーの生涯と驚くべき不思議な冒険』(1719)が出版されてからその変形譚、すなわち「孤独な難破者が漂着した無

人島をいかにして幸福な我が家にしたかを語った物語」(Green 1)が「ロビンソンもの (Robinsonade)」と呼ばれて数百年の間に数多く出版されたことに倣ったことである。

クルートの「エジソンもの」に関する定義はさらに発展し、1933年に書かれたジャック・ウィリアムソンの「冥界の恐怖」(1933)を論じたコラム「昔は我らとともに」では、新たな定義が示されている(3)。「勇敢な発明家が道具や武器を作り、それをを用いて女性や母国(アメリカ)や世界を脅威—外国人であれ、邪悪な科学者や他の人種であれ—から救うが、やがてはその女性を手に入れ、金持ちになるというパターン化したサイエンス・フィクション」(3)である。

クルートによる「エジソンもの」に対する定義は、エリスやその後継者によるスチームマンの物語にそのままあてはめることができる。エリスのスチームマンの物語は、再版を重ねるうちにその模倣作品がでまわることになる。1876年には、トージ社社の依頼を受けたハロルド・コーエンがエリスを模倣してハリー・エントンという筆名で『フランク・リードと平原のスチームマン 西部の恐怖』を書いている(Bleiler〈2〉548)。1879年には、その模倣がセナレンズに引き継がれて『フランク・リード・ジュニアと新しいスチームマン 若き発明家の極西部への旅』が出版されている。「フランク・リード・ライブラリー」として再版される際には、エントンの名前も、セナレンズの名前も消えて「ノーネーム」の作とされるが、エリスからエントン、セナレンズへとつながる巨大なる蒸気機関人間の物語は、「エジソンもの」に対するクルートのふたつの定義に符合している。エントンからセナレンズに引き継がれる過程で「捕らわれの美女」も登場し、その美女を追跡して救出する内容に発展しているのである。

エリスのスチームマンの物語がくり返し再版されたということは、広く読まれたことの証であるが、ビードル社がそのテーマを発展させることはなかった。結末では、さらなる発明に挑む若い発明家の展望が示され、読者にはシリーズ化を期待させる内容になっているにもかかわらず、その期待は満たされることはなかった。スチームマンのテーマは、とくに「ドラマティックなもの、どぎついもの、扇情的なものへの嗅覚がするどかった」(Cox 265)というトージ社にそのまま模倣され引き継がれている。

エリスの作品を剽窃したといえるエントンのスチームマンの物語は、当初、『ニューヨークの少年たち』という週刊新聞に連載された。これはとくに若い読者を対象とした最初の「流血と暴力の物語 (Blood and Thunder)」の週刊新聞である(Cox 265)。ビードル社がスチームマンの続編を出版しなかった理由は、一つに、少年殺人犯の暴力的な性格が当社のウェスタン小説によって形成されたとして「反ビードル社キャンペーン」が展開されていたためと思われるが(Stone 99-104)、結果として、「どぎついもの、扇情的なもの」への抑制が働いたかたちになっている。エリスのスチームマンの物語とエントンやセナレンズのスチームマンの物語とを比べると、後者ふたりの作品では、過激な戦いや殺人の場面がより多く、「インディアン」を敵対する姿勢がより熾烈になっているからである。トージ社が出版したエントンやセナレンズの作品に比べれば、ビードル社が出版したエリスの作品はまだ少年向けの物語としての節度を守っているのである。

D. SF, ウェスタン, 探偵小説

エリスは、東部の発明家の少年を西部に送り込み、それ以前のダイムノヴェル・ウェスタンにサイエンス・フィクションの要素を加えることで、新ジャンルの生みの親となった。セナレンズによるフランク・リード・ジュニアの物語では、さらに殺人犯を探すという探偵小説の要素も加わり、ダイムノヴェルのジャンルの複合化が生じている。サイエンス・フィクション、ウェスタン、探偵ものというテーマが同一作品で扱われるようになってきているのである。作者は不明ではあるが、やがては、発明家フランク・リードが自らの発明品をもって西部のアウトロー、ジェシー・ジェイムズを追跡する話さえも生ま

れるにいたっている。

ダイムノヴェルの興隆期に作家としての最盛期を迎えていたマーク・トウェインは、この大衆向け読物に多大な関心を寄せていた。ダイムノヴェルのかたちで出版された探偵ものが多数出版されていなければ、探偵小説の要素をとり入れた『うすのろウィルソン』(1894)や『トム・ソーヤー探偵』(1896)のような作品は生まれなかったといえるが、トウェインの作品には、SFダイムノヴェルの影響もみられる。たとえば、『アーサー王宮廷のヤンキー』(1889)には、トウェインが、SFダイムノヴェル、とくにエリスの『大草原のスティームマン』を読んでヒントを得たと思われる部分が多々みられる。コネティカット出身のヤンキーという人物設定や、機械好きの人間が時空を移動する設定、さらには、自分が作った科学技術をもって破壊的な戦いをする結末などは、エリスの作品からヒントを得たのではないかと思われる。

本稿では、エリスからエントン、セナレンズにいたる3編のスティームマン物語を比較して、SFダイムノヴェルが科学技術の名をもって「どぎつもの、扇情的なもの」への追求を深めていった経過を明らかにしたい。それは、冒険という名のもとに、合衆国の膨張主義を反映する好戦的な白人男性発明家を描いて、白人男性を筆頭におくアメリカの社会構造を強化していった経過でもある。また、SFダイムノヴェルにおいて、サイエンス・フィクション、ウェスタン、探偵ものなどの、テーマの複合化がどのように生じているかを検証したい。さらには、人気のSFダイムノヴェルがトウェインの『アーサー王宮廷』にどのような影響を与えているかを考えたい。

Ⅱ. 少年の「夢実現の物語」—エリスのスティームマン

A. 天才少年発明家

エリスの『大草原のスティームマン』は、機械マニアの15歳の少年、ジョニー・ブレイナード(Brainard)の「夢実現の物語」である。「こびと」のように身体の小さな、背中に瘤のあるジョニーは、姓にも暗示されているような「すばらしい」頭脳によって巨大なるスティームマンを作りだし、その科学技術の力によって西部探検を果たす。ジョニーと行動をとともにするのは、金発掘の夢にとりつかれたコネティカット出身のヤンキー、イーサン・ホプキンズと、アイルランド人のミッキー・マクスクウィズル、さらには、このふたりに水難事故の際に助けてもらったというハンターのポールディ・ビクネルの3人である。1900年以前のアメリカで、馬を使用しない乗物で地方にでかけることは「冒険」だったといわれるが(Maxim xi)、ジョニーはまさにこの冒険に挑んだことになる。

ジョニーの冒険を可能にしているのは、父親譲りの「かぎりなき発明の能力」である。身体の不自由な少年が、その稀有な発明の能力によって、本来であれば成し得ないような西部への探検旅行を成功裡に導いている。西部で遭遇するさまざまな危険は、スティームマンの「並はずれた力」によって克服されるばかりでなく、金発掘の分け前でジョニーはその後の豊かな人生をも獲得する。西部旅行から帰還したのち、ジョニーは「アメリカ最高の」高等教育を受け、発明家としての人生を邁進することになる。

『大草原のスティームマン』は、発明の能力によって、身体の小さな少年が大冒険と大きな幸せを手に入れる成功物語となっている。身体の不自由なジョニーが、母親の助言を受けながら自宅の実験工場でさまざまな発明に挑戦する様子は、発明家エジソンの伝記的事実を彷彿させる(Baldwin 20)。けれども、エジソンが独立独行の人生を歩みつつ自らの才能を開花させて立身出世を果たしたとすれば、ジョニーは、父親譲りの生得の才能を正規の高等教育でさらに発展させることが予測されている。その意味では、ジョニーは、己の努力のみを頼りに成功への階段をのぼるベンジャミン・フランクリンの「セルフ・メイド・マン」の精神を代表するエジソンとは異なっているといえよう。

B. スティームマン、魔法の発明

小さな発明家が作ったスティームマンは大きく異様である。身長は約3メートルと巨大で、その概観は黒光りしている。顔は鉄製、ふたつの目は「ぞっとするよう」で、口は「途方もなく大きくにんまりと笑ったよう」である。「巨大なる人間が、巨大なるストライドで大草原を走り」、「口か、頭のとっぺんから黒い煙を吐く」。後ろにはワゴンを引き、その座席にはひとりが座り、目の前の「異様な人間の動きを操作する」。条件を整えば時速100キロでも走れるが、通常は時速36キロくらいで走り、すべてが安全だとみれば、ときにその2倍で走る威力を見せたいというのが発明者の意図である。

四輪のワゴンを引いて走るその威力は、馬4頭分にも匹敵し、馬3頭分の力をもつといわれたデディリックの「ほんもののスティームマン」のパワーを凌ぐ。つまり、ジョニーのスティームマンは、その異常な大きさと異様な外観に加え、当時の科学技術が達し得ないスピードと馬力をもつゆえに「アメリカ中に大旋風を巻き起こす」ような発明とされる。トウェインの西部放浪記『苦難をこえて』（1872）によれば、当時の駅馬車は1日24時間走って約160キロから190キロを移動していたという（95）。駅馬車のスピードと比べれば、ジョニーのスティームマンのスピードが、当時の読者にはいかに驚きをもって受けとめられたかが推測されよう。

スティームマンが西部に登場することで巻き起こす大旋風は、1807年、ロバート・フルトンが蒸気船でハドソン河をさかのぼる実験を行ったときのそれに譬えられている。それまでに誰も経験したことのないような「驚愕と恐怖」を巻き起こし、多くの人びとが蒸気船の登場を「世界の終末の前触れだ」と思ったというほどのセンセーションである。

エリスは、ジョニーの発明がフルトン以来の大発明であることを暗に示しながら、「巨大なる人間に似たグロテスクな」スティームマンが人びとに驚異を与える状況を描く。移民たちの列車に遭遇したときも、彼らは「あまりにもぞっとして何もすることができず、ただぼうっと言葉もなく驚いて見つめていることしかできない」。スティームマンの実態をつきとめようとして、馬を駆って後を追いかけるつわものもいても、追いつくことはできず、ジョニーは、「算出不能な価値をもつ逸品の持主」として、「大いなる喜び」を感じている。

「大いなる喜び」は、スティームマンで大平原を疾走すること自体からもたらされ、ジョニーは「それにまさる愉快なことはない」と思う。「驚くほどにスピードが加速されても、ワゴンはまるで線路上を走っているかのように滑らかに進み」、座席に座っている4人は、スピードによって生じた「張りつめた心地よい風」を感じている。

トウェインは『田舎者の外遊記』（1869）でフランスの鉄道旅行とアメリカ西部の駅馬車旅行とを比較し、前者を「退屈」と切り捨てる一方、後者を「だんぜん楽しい」と評している（73）。ジョニー一行がスティームマンで西部を旅して感じているのは、トウェインが「休日のような稀有な浮かれ騒ぎ」と表現したような「楽しさ」である（73）。大平原を疾走する「楽しさ」は、当時、とくに東部に住む多くの若者が夢みたものであろうが、スティームマンはそのスピードが並はずれているために、その物語は若者向け読物としての価値を増すことになる。

スティームマンは、不可能を可能にする魔法の発明でもある。ジョニーは、西部の自然の脅威ともいえるべき、バッファローや大熊と遭遇しても、自ら創造したスティームマンの力によって生き延びている。ジョニーは大人たちが金を採掘している間にひとりで探検にでかけ、バッファローやハイイログマなどとも対決している。身体の不自由な少年が、怒り狂った巨大なバッファローに突進されても、自ら作ったスティームマンを盾として凌いでいる。

機械対動物の対決において、バッファローは、「途方もなく大きいストライドで走る」スティームマンの速度にまさることはできず、その追跡をあきらめている。ジョニーは、「西部の荒野の支配者」と

いう巨大なるハイイログマとの対決にも及ぶが、その大熊もスティームマンを心の後ろ盾として銃で仕留め、そのような冒険ができることに「すばらしいスティームマンを作ったことにもまして誇りに感じている」。スティームマンは、身体の不自由な、小さな少年が大西部への冒険で「男になる」夢の発明品となっているのである。

C. 武器としてのスティームマン

スティームマンが西部に登場する意味は、それが先住民に対応するための効果的な「武器」として機能することを示すことにある。ジョニーは「作ることに幸せを感じる」発明家であるが、彼自身も、彼と一緒に西部に赴く大人たちも、スティームマンを「アレキサンダー大王のように、世界を征服するために」使っている。ジョニーは単独冒険の最後に先住民に遭遇するが、トマホークで襲撃を受ける前に銃を放ってその先住民を殺している。先住民は、少年の西部探検においては、バッファローや大熊などの危険と同様に扱われ、少年が征服して達成感を感じる対象となっている。

このことは、作品の結末によく表れている。大勢の先住民に包囲されたジョニーは、その包囲網を突破するために、スティームマンを時速約 60 キロで巨岩に激突させている。見張りを怠って招いた危機を脱するために、自ら作ったスティームマンを武器として用い、機械を爆発させて生き延びる策をとるのである。スティームマンは、自らを滅ぼして大量殺戮を行う決死特攻隊のような任務を担うことになる。

爆発のショックはものすごかった。それは巨大なる爆弾が爆発したようで、スティームマンは飛び散って粉々になり、あたり一面、死体や破片が飛び散っていた。スティームマンの破片は、うずくまっているインディアンたちの真ん中に落ち、ただ恐ろしい殺戮の図をもたらすばかりであった。無傷で逃げたものは、驚きのあまりに茫然としていた。……スティームマンの爆発によってどのくらいの人が死んだかは、正確なところわからなかった。何人が死に、何人が負傷したかは推測するだけにすぎないが、その数はたしかに膨大だったので、我われの友人がもうインディアンを見ることはなかった。

ジョニーらは、西部探検によって冒険心を満足させ、そのうえ金鉱発掘によって大金も手にするが、その「夢実現の物語」は先住民の大量殺戮のうえに成り立っている。武器として使われ、スティームマンは木端微塵となるが、機械であるゆえに、「最初のものよりももっとすばらしいことができる別のスティームマンを作る」というジョニーの決意によって、すべては解決されてしまう。合衆国の膨張を「明白なる使命」として西漸運動を推進していた国家を反映して、白人男性による先住民への侵略行為が、勇気ある冒険として美化されているのである。スティームマンの巨大さは、巨大なるアメリカ大陸をすべて支配しつくそうとしていた 19 世紀アメリカの時代意識、「巨大妄想」の表象とみることもできるだろう（巽 91）。

エリスのスティームマンは、このように最終的には、白人男性の征服欲を満足させる武器として使われてはいるが、同時に、少年向け小説としての「面白さ」をセンセーショナルに演出する道具でもある。ジョニーとともに西部に赴くボールディが言うように、スティームマンは、「まさに西部にはぴったりのしろもの」として利用されている。つまり、「インディアンがいるところをこのうえなくかっこよく走り抜けて、インディアンをみごとに脅すことができる」手段として利用されているのである。

ボールディが先住民を「脅すこと」に重きをおいているように、作者は、先住民のスティームマンに対する恐れと驚きを描いて、読者を「楽しませよう」とする。先住民に頭皮を剥がされたということで、「禿頭」を意味する呼称を得ているボールディ (Baldy) も、彼らへの恨みを執拗に抱いている様子

はなく、この作品における先住民の扱いは、少年の特異な発明品に対する彼らの反応によって生じるセンセーションを「面白く」示すことに主眼があるといえる。

先住民は、「水難事故の生存者を悪魔のような甲高い叫び声をあげて大殺戮する」「白人の避けがたい敵」として描かれ、「人を裏切る、手に負えない種類」がいることも強調されている。しかしその一方で、彼らの長所も指摘され、それを白人が見習うという視点も示されている。ボールディが、イーサンとミッキーのふたりを秘密の金鉱へ案内するのも、「インディアンのように、自分に示してくれた親切を決して忘れず」命の恩人に恩返しするためである。先住民との壮絶な過去をもつボールディが、「便宜をはかってくれた人に愛顧を示しすぎることではない」という先住民の行動規範を見習っているのである。スチームマンで先住民を驚かすということ自体が、白人文明の優越性を誇示して征服欲を満足させることであり、先住民を白人の西部への夢をはばむ存在ととらえる基本姿勢も変わることはない。けれども、白人の一方的な先住民嫌いの姿勢は避けられ、おもに先住民がスチームマンと相対する驚きや恐怖をセンセーション的に提示することに重きがおかれているといえよう。

スチームマンに遭遇することで先住民が感じるのは、「生涯克服できないほどの恐怖」である。スチームマンは、「真黒な悪魔のように大平原を疾走し」、「いかなるアメリカ・インディアンも真似することができなような」「恐ろしい警笛」を発する。ジョニーらは、先住民に遭遇すると、「真黒い軍隊」のような様相でスチームマンのスピードを速めて追跡し、「生きている人間が感じ得るもっとも強い恐怖」を先住民に与える。機械技術でまさっていることを利用して、「わけのわからぬモンスター」に追跡されるような恐怖を先住民に与え、ジョニー一行は「敵を追跡する楽しさ」さえ感じている。自らの命の危険がなければジョニーらが先住民を殺害することはないが、彼らがスチームマンの「途方もないパワー」をもって先住民に脅威を与え、西部での目的を達成しようとする姿勢は変わらない。

『苦難をこえて』の冒頭で、トウェインは、「遙かかなたの大草原」を旅することに「誘惑されるような魅力がある」と述べている(49)。「極西部」の山脈に分け入り、「バッファローやインディアンに出会ったり」、「各種各様の冒険をして、ひょっとするとしばり首になったり、頭の皮をはぎとられたりして、すごく面白い目にあって」「英雄になる」と書いている(49)。エリスの『大草原のスチームマン』は、東部に住む若者の多くが抱いていたと思われる、このような大西部という「不思議な未知の世界を探検する」夢を、スチームマンという科学技術で実現する話となっている。

トウェインと異なり、現地に行ったことのないエリスが書く大西部は、距離や地理などに不正確なことも多々ある(Bleiler (2) 220)。たとえば、セントルイスに住むジョニーが西部探検の拠点となる町インディペンデンスにスチームマンを解体して蒸気船で運ぶとしているが、その町はミシシッピ河に面しているわけではなくとうてい無理である。イエローストーン川からセントルイスまで、2000キロ以上の旅程を負傷したボールディが移動することが可能かという問題もある。だが、『大草原のスチームマン』が、当時の少年に「不思議な未知の世界への探検」への夢を抱かせ、スチームマンという途方もない新発明品が、その夢を増大させたのであろう。科学技術は、白人少年を「英雄=男にして」アメリカを白人男性中心の国にする強力な方便となっているのである。

Ⅲ. エリスからエントン、セナレンズのスチームマンへ

A. 威力を増すスチームマンと残虐シーン

エントンのスチームマンは、エリスのそれと比べるといちだんと威力を増している。身長が70センチほど大きくなって約3メートル70センチとなり、走る速度もパワーアップされ、通常で時速80キロ以上の走行が可能となっている。後ろの荷台の金網には、バッテリーによる電気が通じていて一度に10頭の馬を殺すことのできる強い衝撃を放つシステムをそなえている。蒸気機関人間としての構造は

同じだが、全体的にその威力がエリスのものより向上し、「巨大なるガラスの目」や「けた外れに大きい口」の「モンスター」であることが強調されている。

スティームマンは、フランク・リードなる16歳の天才発明家の発明品とされている。彼はニューヨークの裕福な家庭の「甘やかされた」ひとり息子であるという点で、セントルイスの母子家庭に育ったというエリスの発明家の状況とは異なるが、天才少年発明家が巨大なる発明品を秘密裡に作ったという設定は、エリスの作品と同様である。発明好きの少年が「時代のもっとも偉大なる発明品の一つ」をさしたる目的もなく作り、そこにミズーリからいとこのチャーリー・ゴースがやってきて、ふたりで「大いなる西部」へ冒険の旅にでかけるという設定である。

冒険の目的は、ハンターであるチャーリーが、「インディアンに悩まされている」ので、大平原をスティームマンで「かっこ良く」疾走し、蒸気機関のしくみがどのようなものかを知らない彼らを「震えあがらせて」「ものすごく楽しい思いをする」というものである。16歳のチャーリーがハンターとはいえ、スティームマンを解体して輸送する費用を支払えるという設定などに不自然さはあるが、少年による西部探検物語というかたちで物語が開始され、この点においてもエリスの物語を模倣している。

エリスの物語を模倣している点は、その結末においても同様である。フランクとチャーリーは、最終的には、強力なる「敵」を制覇して西部探検旅行を成功裡に終え、加えてそれぞれに5千ドル相当の金も手にしている。「勇敢な、西部の大草原の真の息子」と呼ばれるハンター兼ガイドのダッシュ・ハレットが、その死にあたって金のありかをフランクらに伝えるためである。フランクは、西部探検旅行によって、未知の世界への冒険の夢を実現させるだけでなく、僥倖に恵まれて大金をも手にし、金持ちになるという現実的な夢をも実現させている。つまり、西部という空間が、先住民らを敵とする戦いという意味での冒険と、一攫千金の夢とを約束する場所として存在し、そこでの経験によって白人少年が「男になる」過程が描かれているのである。結末では、フランクが西部旅行で得た金で蒸気機関のしくみで走る馬、スティームホースを作る決意を表明することで、読者につぎの冒険物語への予告をしている。エン-tonは、エリスによるスティームマンの物語の枠組みをそのまま使って、フランクなる天才少年発明家の冒険物語を書いたことになる。

エン-tonによるフランクの冒険物語は、スティームマンによる少年の西部探検旅行という設定だけでなく、先住民、移民たちの列車、バッファロー、大熊など、旅行者が西部で遭遇するであろう人間や動物などの設定などにおいても、エリスの物語に酷似している。しかし、エン-tonの作品は、探偵や悪漢など、さらに多様な登場人物も配して、戦い、捕囚、追跡などの連続を平原の火災シーンを多用して描き、読物としては、エリスの作品とは異なった印象を醸しだしている。エリスの作品が少年の冒険物語という体裁を守っているとすれば、エン-tonの作品は、主役のふたりが少年であることを忘れさせるほど過激である。そのような印象を生み出す原因となるのは、一つには、先住民らを敵とする戦いや殺人の場面が多く、しかもそのような場面がよりリアルに描かれていることである。

西部に足を踏み入れてすぐにチャーリーは先住民を殺しているが、その様子は、「ライフルが甲高い音をだしてとどろくと、ほぼ同時に、ミズーリの射撃名手の寸部も違わない弾が身体を撃ち抜いて、レッドスキンは命奪われ地面に倒れた」とある。チャーリーは、白人にトマホークを振りあげていた先住民をみごとな射撃の腕前で殺したことが称賛され、フランクは、チャーリーが「ひとりの人間の命を救った」とみなしている。「野蛮人」の先住民は「人間ではない」ことが前提とされているのである。「荒々しい」性格の先住民について、それが「獣の性質」とであると白人同士話すくんだりもある。

石炭や鉄の鉱脈を求めて西部にやってきたという英国人に、この「獣の性質」を説明するハンター兼ガイドのダッシュ・ハレットは、馬の乗り方を見ただけでオセージ族であることを言いあて、彼らを「冷酷で血に飢えた放浪の大盗賊集団」と呼ぶ。「大平原でよくみかける、無鉄砲な命知らずの男性のひとり」というダッシュは、先住民の種族を名指しで、しかも団体として酷評している。彼は終結部近く

で白人の盗賊に撃たれて非業の死を遂げ、その死は英雄の最期として感傷的に描写されるが、彼自身は、先住民の手に落ちたのではないことを喜んでいる。先住民がダッシュを殺害すれば、1年は勝ち誇るという理由からである。

じっさい、ダッシュの先住民への恨みは強く、彼らとの戦いの末に愛馬が死ぬ運命に直面すると、愛馬に復讐を誓う。「くたばれオセージ族の野郎、インディアンの殺人鬼がひとりでも生き残って、キーキー声をだしたり、ナイフを引き抜いたりするかぎりは、絶対やつらを追いまわしてやる」と叫び、彼らを「一掃する」決意を固めている。先住民は、ダッシュにとって「卑劣漢」であり、「悪魔」であり、馬よりも下位におかれるべき存在である。

人間扱いされない先住民は、叫び声をあげただけでも殺されている。フランクとチャーリーのガイドを務める老人スナップ・カーターは、先住民の気管をつかんで効果的に息をさえぎり、「叫び声をあげたのでおまえを殺す」と言う。そして、その殺人シーンは、「ガイドの右手が振りあげられるとスピードと力が加えられて落ち、鈍いズシンという音がしてナイフの刃がインディアンの身体に深く沈んでいったことがわかった」と描写されている。

「青白く、ほっそりとして」「勉強好きな性格で、並はずれた思索家」というフランクでさえ、西部では、両手にピストルをもち、「インディアンの頭髪のまげをみるたびに発砲している」。ニューヨーク育ちの少年が、少年とは思えない冷酷な戦いをくり広げているのである。西部に出発するにあたって、彼はスティームマンだけでなく、「インディアンの悪魔に出会ったと思うような発明品」をいくつも作ってもっていくが、そのなかには「夜用ピストル」のような夜間の戦いに威力を発揮する武器もある。「すばらしい」科学技術は、白人が先住民を撃退するために有効な手段として当然のごとく利用されているのである。

B. 戯画的な悪人と異人種間結婚

フランク一行の戦うべき最大の「敵」は、先住民と白人の盗賊からなる一団で、その首領サム・スラッシャー（切りつける人）のもと、3人のスー族の酋長が加わっているとされている。キャプテンと呼ばれるその首領は、「ミズーリいちばんの喉切り名人」と説明され、明確で戯画的な悪人設定がなされている。フランクたちは、彼の一団を「一掃する」決意でのぞみ、最終的には、その決意をスティームマンの超人的な力によって実現させている。敵の罠にはまって、外部からの応援なしにはその状態を脱し得ない状況であったにもかかわらず、フランクがスティームマンを時速80キロくらいで走らせて、240キロも離れた騎兵隊の基地まで、応援を頼みに行くためである。スティームマンの驚異的なスピードによって、援軍を頼むことができ、敵を絶滅させることが可能になっているのである。

先住民たちは、スティームマンが「悪魔」か「尋常ではない悪魔の使いのようなもの」で、「犠牲者を求めて地球上を放浪するためにつかわされた」とみなし、その追跡を早々にあきらめている。白人たちはそのような恐怖は抱かず、スラッシャーなどはスティームマンを追跡するが、馬で追跡してもスティームマンのスピードにかなうわけもなく、追跡をあきらめざるを得ない。フランクたちの探検旅行を成功裡に導くものは、結局は、スティームマンの超人的なパワーということになる。エントンは、スー族の酋長に発言させて、「先住民のもっとも価値ある獵場」を「侵入してきた白人たちが奪いとった」という先住民側の視点を示している。しかし彼らを移民たちの列車を襲う盗賊にすることで、白人の行為を正当化している。

エントンのスティームマンの物語がエリスのそれと最も異なる点は、一つに、異人種間結婚が描かれていることである。西部の鉱脈を求めてロンドンからやってきたというジョージ・オーガスタス・フィッツヌードルが先住民に捕えられ、白人との戦いで死んだ先住民の未亡人と結婚するという設定である。エントンは、読者の興味を引く一手段として、白人男性と先住民女性との結婚という、ダイムノ

ヴェル第1号以来の人気の主題をとりあげたといえるが、その扱いは、きわめて興味本位のものである。

ダイムノヴェル第1号『マラエスカ 白人ハンターのインディアン妻』(1860)の作者アン・S・ステイーヴンズが、先住民女性の悲哀に満ちた人生を女性としての同情をもって描いたとすれば、エントンが描く異人種間結婚は、白人男性の一方的な視点に立つもので、先住民女性への偏見に満ちている。その実態をよく知らない作者が、読者の喜ぶものを提供するためだけの目的で、スティームマンの物語に異人種結婚のエピソードを挿入したと思われるものとなっている。

偏見に満ちた異人種間結婚の描写がもっとも顕著なのは、先住民の未亡人たちが争って白人男性のジョージと結婚しようとするくだりである。先住民の女性たちが、競って白人男性を求める姿が描かれている。白人との戦いで「気高い戦士」を失った先住民の男性たちは、未亡人たちが「拷問し、戯れ、はずかしめ、火あぶりにする」ことができる白人捕虜を連れて帰れば、自分たちを「笑うことはできないであろう」と考えてジョージを連れ帰るのであるが、そのジョージに未亡人たちは群がっている。3人の未亡人はジョージが着くやいなや彼の毛の服に指を入れ、英語を少し理解するそのうちのひとりには、自分の胸を叩いて彼にアピールする。夫の戦死を悲しむ様子は描かれず、3人の未亡人がナイフを抜き、熾烈な戦いをして、新しい夫を獲得しようとするシーンが描かれている。先住民の社会のなかには、女性が結婚相手を選ぶうえでかなり選択権をもつ場合もあったといわれ、また、ほとんどの部族では、自由な性的表現が奨励されていたといわれるが (Evans 11)、それでも、エントンの筆致は興味本位に終始している。

ジョージ自身は、「恐ろしいアメリカの習慣である火あぶりの刑」になるよりは未亡人との結婚を選ぶという姿勢に徹するものの、美しい未亡人への好みを明らかにして、身勝手な白人男性の姿勢を示す。女性同士が彼をめぐって戦うことに対しても、「文明人には目新しいこと」だとして、「その奇妙な光景に対する」彼の「かぎりない驚き」が描かれる。「アフリカではそのようなことをすると聞いたことがあるが、アメリカにアマゾンがいるとは知らなかった」というのがその感想である。

最終的には、先住民の未亡人と結婚したこの経験について、ジョージは「先住民が見境のない関係を推奨する恐ろしい異教の地にほとんどうんざりした」と述べ、「文明社会」へ戻りたいとロンドンへ戻っている。Hの発音に難のあるコックニーで、当時のイギリス社会では、貧しい労働者階級出身者として差別を受けていたと思われるジョージであるが、その彼がアメリカで先住民と相対してその文明を批判し、白人文明の優越性を誇示している姿は皮肉ではある。

白人ハンターと先住民女性との結婚を描いたステイーヴンズは、白人の先住民への執拗な偏見が悲劇を生み出す元凶とみなす視点を示した。その意味では、ハーマン・メルヴィルが『詐欺師 その仮装』(1857)で指摘した先住民嫌いの不毛さに通じる姿勢を示したといえる (132-35)。一方、エントンの作品では、先住民に対するイギリス人男性の強い優越意識と覗き趣味が顕著に表れたものになっている。異人種間結婚のテーマは、エントンの作品においては、読者の関心をかきたてる手段以上にはなっていない。その一端は、ジョージと結婚する先住民の未亡人に、イディッシュの名前シャバスガイが用いられていることにも表れているといえよう (Bleiler 〈2〉 548)。つまり、エントンは、その実態をよく知らずに、読者の興味を駆りたてるだけの目的で白人男性と先住民女性との結婚を描いたのではないかということである。

C. アイルランド人と探偵、そして黒人の従者

エントンのスティームマンの物語からセナレンズのスティームマンの物語に引き継がれるのは、アイルランド人と探偵のキャラクターである。アイルランド人については、エリスのスティームマンの物語でも主人公の冒険の伴として描かれ、それがエントンに引き継がれているが、そのキャラクターがさらにセナレンズに引き継がれることになる。探偵についてはエリスの物語には登場せず、エントンの物語

では、政府から派遣されて盗賊団を捕まえるという設定で登場している。セナレンズの物語では、主人公自らが探偵の役割を務めていて、探偵による事件解明という設定が中心となっている。

フランク・リードの息子、フランク・リード・ジュニアが自ら発明したスチームマンとともに西部に赴くのは、殺人犯を追跡して「殺人事件のミステリーを解決し」、無実の罪で牢獄につながれている父親の友人を救うという「高貴な目的のため」である。スチームマンは、正義を実現するという「人道的で英雄的な目的のために利用され」、フランク・ジュニアとともに、いわば探偵の役割を果たすことになる。物語は、フランク・ジュニアが殺人事件を解決して終結し、ダイムノヴェルの探偵ものと同様のパターンを示している。

主人公がその発明品とともに探偵の役割を果たすとはいえ、その「西部の荒野」への旅が「スリルにみちた」冒険旅行であることには変わらない。セナレンズのスチームマンの物語は、エリスやエントンの作品と同じく、西部探検の物語ともなっている。フランク・ジュニアは、「大平原の先住民やカンザス西部やコロラドの無法者」が「いかにスチームマンに反応するか」を思い描いて、「生まれながらの」「冒険好き」の好奇心を示す。その旅は、「人間の経験できるもっともスリルにみちた冒険」とされるが、その冒険の主たる内容は、捕囚と追跡をめぐるくり広げる、カーボーイや先住民たちとの銃撃戦である。

フランク・ジュニアは、前2作のスチームマンの発明者と異なり成人していて、その銃撃戦の指揮官を務めている。幾多の銃撃戦はフランク・ジュニアの勝利に終わり、彼は、犯人一味や先住民に捕らわれていた美女を救ってその旅を終えている。「世紀にわたって語り継がれる話」とされる「新しいスチームマンとそのすばらしい西部への旅」は、フランク・ジュニアが救った美女の結婚で終わるが、彼がすでに妻帯者であるため、他の男性との結婚となっている。フランク・ジュニアが赴く西部は、エリスやエントンのスチームマンの物語の場合のように、たんに少年の冒険心を満足させ、金発見による一攫千金の夢を実現する場所ではなく、数百人単位の死亡者をだす、銃撃戦を制する場所となっている。

フランク・ジュニアの冒険旅行に同行し、おもに銃撃するのは、長年、忠実に仕えてきたというふたりの「召使い」で、アイルランド人のバーニー・オーシェイと「黒人」のポンプである。アイルランド人と黒人が発明家一家の召使いであるということはその社会的地位を顕著に示しているのだが、ふたりはいたずらなどをして互いを困らせていて、訛あふれるそのやりとりが漫才のような面白味を生んでいる。アイルランド人は、エリスの作品から発明家とともに旅をするコミックな人物として登場し、エントンの作品では、酒と音楽の好きな「陽気で、便利で、性格のよい」中年男としてとくに詳しく描かれ、発明家の旅に途中から加わってはいた。セナレンズのスチームマンの物語におけるアイルランド人は、とくに音楽好きな性格が強調されることはないが、それでもビールのジョッキをもった陽気な性格の「奇妙な風体の小男」として最初からフランク・ジュニアの西部行きに加わり、危機一髪の状況のなかでも「機転のきいた」正確な判断ができることが評価されている。

ポンプは、自由黒人であるが、フランク・ジュニアへの忠誠心が強く、その意味では、白人に都合のよい黒人キャラクターの典型として描かれている。彼に「マスター」と呼ばれるフランク・ジュニアは、「黒人だけれども、白い心をもっている」と評し、白人に奉仕するかぎりにおいてよい黒人とみなす視点を示す。従者仲間のバーニーは、この黒人を「黒ザル」「くろんぼ」などと侮蔑的な呼び方をしてもいる。しかしポンプは、危機にあっても、自分のことより他者のことを考える「勇気」と、任された任務を果たそうとする「責任感」をもつ人物として描かれている。ともに旅するふたりとも緊密な関係を築いていて、ポンプが先住民に捕えられるとバーニーは自分の命を犠牲にしても彼を助けると言い、フランク・ジュニアはその復讐を誓っている。この作品におけるポンプは、ダイムノヴェルに登場する非白人種としては、多少好意的に描かれているといえよう³。

スチームマンを創造したフランク・リード・ジュニアの特異な能力は、先のスチームマンの発明者の場合と同様、努力によって獲得したものというより、生得のものとされている。彼は、「蒸気や電気関係の発明で世界的に著名な」フランク・リードの偉大さを「引き継ぐ」息子であり、「発明の多様さと複雑さにおいては父親を凌いでいる」。父親自身も、「どっしりとして」「手に負えない」感じのスチームマンをみて、息子が自分よりまさっていることを認めている。フランク・ジュニアは、己の努力のみを糧として成功を目指す独立独行の人というより、「世界的名声を得ている」父親の偉業を引き継ぐ発明家であり、この点において、フランク・リード的「セルフ・メイド・マン」の価値観を示すエジソンと異なっている。

D. スチームマン、戦車となる

セナレンズのスチームマンは、身長3メートルあまりで、その大きさでは前作と争わない姿勢を示している。しかし、「骨組みは鉄製」で、しかも彼が引くワゴンには防弾の細かい網が天井にまで張られ、その一角には、石炭箱だけでなく、弾薬や武器を入れる場所もある。つまり、セナレンズが創造したスチームマンは、戦闘への備えがより強固となっているのである。「改善された点は多々あり」「スピードも増している」とくり返しているが、どのくらいの速さかは明らかにされていない。しかし、スチームマンが瞬時に最新の自転車ばかりか速足の馬をも追い抜いていることを考えれば、そのスピードは時速100キロをゆうにこえることになる。

戦闘への備えが万全のスチームマンは、西部では文字どおり戦車のような働きをする。フランク・ジュニア一行は、殺人事件の容疑者アーティマス・クリフが率いるカーボーイの団ばかりでなく、スー族などの先住民を敵として銃撃して、多数を死にいたらしめている。フランク・ジュニアは、スチームマンによって自分たちの安全は確保して、召使いに「撃てるやつは誰でも撃て」と命令する。スチームマンを「破壊的で有効な射撃」を実行する盾として利用しているのである。銃撃には、連発銃も使用され、「大いに効果的な結果」を残す。その様子は、「たえず一斉射撃がつづき、カーボーイは何もできず羊のように落馬した」と描写されている。

スチームマンは、射撃戦を行う際に盾として利用されるばかりでなく、それ自体が、武器として多くの命も奪ってしまっている。スチームマンが「恐ろしいほどのスピードで」走った後の地面には、「死体の山や怪我をしたカーボーイたちが横たわる」。カーボーイたちがスチームマンの手綱をとろうとすれば、その「どっしりした本体は彼らをハエのように叩きのめし、ワゴンの重い車輪は彼らを押しつぶして、死または人事不省にいたらしめる」。バーニーとポンプは、スチームマンが「ロケットのように」進むなか、打ち負かされた敵に対して、大喜びしてとどめの弾を放っている。

フランク・ジュニアは自分の発明品を売ることを好まず、自分自身が使うのみであるが、「いつも弱者や弾圧されている者のために使用している」と公言している。容疑者一味や先住民に対するスチームマンによる大量殺人は、無実の罪で獄につながれている人や捕囚された人びとを助けるという名目で正義とされてしまうのである。そのことは、フランク・ジュニアの銃撃戦に、殺人犯を追跡する自警団の一行や騎兵隊なども加担していることでも強調されている。強力な破壊力をもつ新しい発明品で先住民らを大量殺人に及ぶ白人発明家の好戦的な姿勢は、国家の意向を反映しているということである。

E. 先住民はつねに敵

フランク・ジュニアがスチームマンの物語で遭遇する先住民は、スー族、ポーニー族、アパッチ族などであるが、登場場面の少ない後者ふたつの種族を含め、いずれの種族の先住民も「よき白人」の敵として描かれている。極西部は、「文明から800キロ離れた、敵愾心をもったスー族の本拠地」と説明され、フランク・ジュニア一行は、到着するやいなや臨戦状態のスー族に遭遇している。彼らは、「ほ

んものの悪魔のようにワーワーと奇声をあげて」ポンプを捕まえ、連れ去っている。その酋長は、「血に飢えた」「卑怯な」「無慈悲な」という型通りの語で形容され、「赤い悪魔」として「大虐殺」を行ってきたと説明されている。入植者には、彼の名前が、「恐怖という語と同義語である」とさえいわれている。

先住民は、フランク・ジュニアの西部旅行をスリルにみちた冒険として描くための「手段」として利用されている。彼らが、フランク・ジュニアの追跡する殺人犯の一味と行動をともにしていることも明らかにされ、極西部を旅するスリルは、悪人と先住民に理由もなく捕囚され、命の危険にさらされるために生じる、という図式ができていく。スリルを継続して提供するために、捕囚、追跡、救出というパターンが何度もくり返されて、物語を長引かせる策もとられている。捕囚から救出までのパターンによって生じるスリルは、短い文や一文のパラグラフの多用によって演出されている。「捕らわれの美女」は、ときに勇敢な態度をみせるが、その存在は、先住民らに捕らわれ、白人男性に救出され、白人男性と結婚する、という筋書きを演出するために利用されている。その意味では、エリスによる『セス・ジョーンズ』における女性の扱いとまったく変わっていない。女性は、白人男性に救出されて彼を英雄にするために存在しているのである。

1901年、大統領に就任したセオドア・ルーズヴェルトは、若き日の西部経験をもとに全4巻からなる『西部の征服』（1889-96）を出版している。その第1巻で、彼はアメリカ政府の先住民政策を告発したヘレン・ハント・ジャクソンの『恥ずべき一世紀』（1881）を批判している（334）。ジャクソンを「馬鹿げた感傷家」と呼び、その書を「徹頭徹尾まったく信頼に値しない」と切り捨てている（335）。そして先住民に対しては、「好戦的で、血に飢え、相互にねたま合い、白人を目の敵にしていた」（333）という所見を述べている。

ルーズベルトは、歴代大統領の先住民に対する絶滅政策を支持し、その虐殺と土地の強奪は「不可避だったし、最終的には有益なことだった」とも述べている（Stannard 245）。また、女性や子どもを含む無抵抗のシャイアン族が米軍に虐殺された、サンドクリークの大虐殺についても、「正当で、有益な行為」（134）として支持している。

このようなルーズベルトの姿勢は、今まで見てきたSFダイムノヴェルの先住民に対する姿勢につづるものであるが、彼がその後ノーベル平和賞を受賞し、偉大な大統領として国民の人気を集めていることを考えれば、その姿勢が大勢のものであったという一つの証となる。大勢の意見であったからこそ、先住民を敵として殺害するダイムノヴェルがよく読まれたということであろうし、また、よく読まれたことで、さらに大勢の意見が拡大され、強化されたということであろう。

F. 世界への冒険

フランク・ジュニアの冒険は、スチームマンによる西部への旅ばかりでなく、新奇な発明品を作っては世界各地へと広がっていく。彼の発明品の力によって世界との距離は縮まり、読者は、現実社会には存在しない乗物による冒険旅行を経験することになる。偉大なる発明家の発明品は、世界空間との距離を縮めるだけでなく、めずらしい多様な動物や「好戦的な先住民」たちの「危険」をも克服する手段となる。白人の利益が優先される侵略的な旅が冒険とみなされ、それが短い文章や一文のパラグラフを多用して表現され、臨場感を演出しているのである。

たとえば、「フランク・リード・ライブラリー」第15号の『フランク・リード・ジュニアの空飛ぶ電気カヌー　ダイヤモンドの谷への探検　ブラジルへのスリルあふれる冒険旅行』では、カヌー型の飛行船でアマゾンへの探検が試みられている。フランク・ジュニアは、アイルランド人のバーニーと黒人のポンプを従者として、「野蛮で好戦的な種族がたくさんいる」という谷へ赴いている。「125人の武装した探検隊のうち帰ってきたのはひとりだけ」という谷であるが、「空飛ぶカヌーで、すばらしいダイア

モンドの谷の危険に挑むことができる」というのが、フランク・ジュニアの意気込みである。じっさい彼は、この「夢の発明品」によって南アメリカ大陸を空から眺め、大蛇やゴリラなどの危険からも逃れ、「親指の爪ほどの大きさのダイヤモンド」もみつけて無事帰還している。

ブラジルの先住民たちは、「人間のかたちをした狼」のようにフランク・ジュニアに襲いかかるが、彼は「人道的な心根の持主」なので彼らを「大殺戮」に及ぶことは好まない。先住民同士の戦いを空から傍観する姿勢をつらぬき、「白人の敵と公言する」種族についても、旅人には関係ないと言う。しかしそのすぐ後で、「双方が絶滅すれば、それこそが最良のことだ」と考えている。

フランク・ジュニアの冒険は、スTEAMマンによるアメリカ西部への探検と同様、新しい発明品によって世界の見知らぬ遠隔地にでかけていくことであり、その発明品を武器として現地の住民や動物と戦い、白人の経済的利益を獲得することなのである。シリーズ化され、パターン化された「フランク・リード・ライブラリー」の愛読者たる少年たちは、アメリカ文明の拡大を正義とみなす、きわめて帝国主義的な冒険物語に熱狂したことになる。パターン化された好戦的愛国主義の物語をくり返し読むことで、白人男性中心の国家の膨張を正義とみなす意識を植えつけられたということであろう。

サイエンス・フィクションの父と称されるフランス人作家ジュール・ヴェルヌは、SFダイムノヴェルに関心を寄せていたことが指摘されている（野田 13-14）。「フランク・リード・ライブラリー」が人気を博しているころ、ヴェルヌはすでにその主要作品を発表していたが、アイデアのマンネリ化に悩み、ダイムノヴェルにヒントを得て書いた短編があるともいわれている（14）。セナレンズを「アメリカのジュール・ヴェルヌ」と呼ぶどころか、ヴェルヌを「ヨーロッパのセナレンズ」と呼ぶべきという意見もあるとすれば（14）、ヴェルヌとSFダイムノヴェルとの関係も、今後さらに追求されるべきであろう。

とくに、ヴェルヌが1880年に出版した『スTEAMハウス』の2巻本は、英国人たちが蒸気機関のしくみで動く巨大なる金属製のゾウとともにインドを旅する話で、その設定は、スTEAMマンの物語をはじめとするSFダイムノヴェルのそれにかぎりなく近い（Moskowitz 115）。トージ社には、ヴェルヌの作品を剽窃して『地球の中心への旅』（1879）などを出版していて、ダイムノヴェルがヴェルヌの恩恵を受けていたことはたしかであるが、逆にヴェルヌがダイムノヴェルの影響を受けていたともいえるのである（115-16）。

IV. フランク・リード、ジェシー・ジェイムズを追跡する

A. ジャンルの融合

SFダイムノヴェルは、1890年、トージ社より出版された『発明家フランク・リード、スTEAMチームでジェイムズ一味を追跡する 失われた日記のスリルあふれる話』にいたって、探偵小説シリーズへの融合を果たしている。この作品は、「ノーネーム」という出版社用ペンネームが記されない唯一のフランク・リードの物語で（Bleiler 〈2〉 263）、作者は不明であるが、「ニューヨーク・ディテクティブ・ライブラリー」第416号として出版されている。

発明家が探偵のような役割を果たす姿はスTEAMマンによる冒険物語においてもみられたが、トージ社の探偵小説叢書の一つとして出版されたこの作品では、発明家フランク・リードがプロの探偵ふたりとともに、その「すばらしき発明品」をもって列車強盗のジェシー・ジェイムズ一味を追跡しており、SFと探偵ものが融合したかたちとなっている。発明家が被害を受けた鉄道会社3社の依頼を受けてジェシーを追跡する場所はアメリカ西部であり、結果として、ウェスタン、サイエンス・フィクション、ディテクティブ・フィクションというダイムノヴェルの3ジャンルが一つの物語に結集されている。ダイムノヴェルの出版社は、つねに購買意欲をかりたてる手立てを考えていたと思われるが、人気

の3ジャンルが融合した物語の登場は、そのような努力の一つの表れとみなすことができよう。

B. 発明家と無法者との対決

ダイムノヴェル出版社による必死の販売戦略は、実在のアウトロー、ジェシー・ジェイムズを再登場させているところにもみられる。トージ社については、ジェシー存命中からその物語を出版していたが、犯罪者の本を輸送することに反対する郵便関係者の不興を買ってその出版を断念せざるを得なかったという経緯がある (Cox 143)。しかし、1882年にジェシーが銃殺され、兄のフランクが逮捕されると、兄弟の人生や裁判についての記録を出版したり生前に出版した物語を再版するばかりでなく、D・W・スティーヴンズやフランシス・W・ドーティなどによるジェシー一味の物語を新たに出版するようになる (143)。奇想天外な発明品を作りだす発明家のフランク・リードが、その最新の発明品を駆使して列車強盗のジェシー一味を追跡する新作は、読者にとっては、サイエンス・フィクションの発明家とウェスタンの無法者というふたりの異なった人気キャラクターを同時に楽しめるわけで、ダイムノヴェル出版社の読者サービスがよく表れた作品といえよう。

故人となって久しいジェシーを当世の人気キャラクターが追跡する物語を提供するにあたっては、過去の日記が明らかにする冒険物語という手法が導入されている。「すばらしい発見」と題した「プロローグ」が冒頭に付され、ミズーリの森で狩りをしていたふたりのハンターが、鉄の箱に入った発明家の日記を偶然見つけるという苦肉の策がとられている。発明家の日記には日付もなく、ただ過去の出来事が「私」の視点で語られているだけで、形式的にも日記とは呼べない代物である。しかし、不定の過去の出来事が綴られている日記が明らかにする物語という枠組みの設定によって、シリーズ化されていたダイムノヴェルの人気キャラクターと過去に実在した列車強盗との時をこえた対決が可能となっている。

ジェシー一味を「皆殺しにする決意」に燃える鉄道会社から依頼された探偵の物語にもかかわらず、その探偵たる発明家はジェシーらを捕まえることができない。成功物語の形式をとることなく物語が終結しているわけだが、これは、一つに、つぎの物語への布石でもある。ジェシーが捕まったり、または殺されたりしては、つぎの物語が書かれなくなってしまうために、彼は生き延びなければならないのだ。発明家が確実に成し遂げるのは、ジェシーが盗賊であることを知らずにいる女性にその正体を告げて、騙されるのを未然に防ぐことぐらいである。ジェシーは逮捕できなくても、発明家と彼に随行するふたりの探偵は最後には3万ドル分の金を発見して金持ちになっており、金銭的な意味では成功物語となっている。

ジェシー一味を追跡するために発明家が新たな発明するのは、スチームチームで、これは、蒸気で動く金属製の2頭の馬が引くワゴンである。発明家はスチームマンに続いて、その馬版ともいべきスチームホースを作っていたが、「向うみずな動機で行動する向うみずな男たちの集団」というジェシー一味を追跡するにあたっては、それを2頭立てにしてパワーアップしている。ワゴンには防弾設備が整い、その後部には大砲が搭載されて、スチームチームはたんに「電光石火の特急便のスピード」を誇る乗物としてではなく、武器としての威力も増している。

発明家は、3キロ先の的さえも撃つことができるという長距離用ライフル銃も発明して装備しており、スチームチームの戦いに対する備えは「恐るべきもの」である。機械装備に万全を期すのは、発明家が、ジェシー一味の追跡に比べればそれまでの冒険が「赤ん坊のようなもの」であることを自覚しているためである。「金属製の馬が恐ろしい鼻あらしを吹き、耳や鼻孔から火を放つ」「黄泉の国から逃げてきた悪魔であるかのような」スチームチームこそが、ミズーリを走る三つの鉄道会社を襲った「大物強盗団」と対決するにはふさわしいということである。「ピンカートン社いちばんの敏腕探偵」さえ成功せずに命を落としたという難事件には、強力な武器を次つぎと発明して西部を制覇していたフランク・リードのような著名な発明家しか対抗できないという対決の構図を示しているのだ。

実在のピンカートン探偵社とジェシー一味との攻防はじっさいにくり返され、有能という評判の探偵が何人も死んでいるが（岡田 134-35）、SF ダイムノヴェルはそのような事実を織り込みつつ、強力な戦いの装備を新たに発明して臨む発明家をジェシーに対決させている。最強ともいえる対決者を配することは、冒険物語としての娯楽性を高めるばかりでなく、西部の無法者の手強さを逆にきわだたせることになる。このことは、ジェシー一味が、発明家の「恐るべき」最新武器にさえ屈することなく逃げおこせてしまう結末によってさらに強調されている。

C. スティームチームとジェシーの愛馬との対決

発明家と無法者との対決には、いくつかの山場が用意されているが、その一つは、発明品と愛馬との対決においてみられる。実在のジェシーが捕まらずに犯罪を重ねることができたのは、彼が南北戦争中にウィリアム・クラーク・クウォンドレル率いるゲリラ集団に加わって馬の重要さを知り、彼自身、乗馬の達人になったためといわれている⁴。ガンマンとしての腕前ばかりでなく、乗馬の腕前にたけていたことが、ジェシーを「最強の無法者」にしたというのである。したがって、ジェシーを追跡するダイムノヴェルでは、金属製の馬2頭からなる発明家のスティームチームが、ジェシーの馬とよく競い、打ち勝つことで意味をもつことになる。

ジェシーとその馬については、D・W・スティーヴンズによる『ジェシー・ジェイムズとサイロック探偵による馬の追跡』（1891）や「ノーネーム」による『ジャック・ライトとその電気馬車 ジェイムズ一味反対同盟』（1893）などがトーゾ社から出版されていて、ダイムノヴェルの人気の題材でもあった。発明家が「私のすばらしい機械」と呼ぶスティームチームとの対決においても、ジェシーの馬の優秀さと彼の騎手としての優秀さが強調されている。

ジェシーの愛馬サイロックは、主人同様、実名で登場しているが、「驚異的な力」を発揮して、最新の武器を搭載したスティームチームのパワーに引けをとることはない。大平原における銃撃戦で、ジェシー一味から「おびただしい弾丸の雨」を受け、発明家はスティームチームのスピードをあげて一味の引き離しをはかるが、サイロックだけは執拗に並走を続ける。サイロックとスティームチームとの対決では、大平原における激しい銃撃戦、逃げる馬車と追う駿馬という、やがて20世紀の映画やテレビがひんばんに描くようになるシーンが展開されている。

その黒い驚異は、流星のごとくスティームチームとぴったり肩を並べて、地面を飛ぶように走った。……私は座席の下の狭い隙間から見ることはできたが、高貴な動物は2頭のスティームホースを追い越そうと渾身の力をしぼっていた。ジェシー・ジェイムズは、おそらく、それほどの驚異的なスピードで走るサイロックに乗ったことはなかったに違いない。そのようなすばらしい馬の驚異的な力を知らなかったではないかとも思った。

サイロックは好敵手といえる馬に出会ったのだ。

その勇敢な馬は追い抜くことのできない馬に今まで出会ったことがなかったが、見よ、ここには金属製の馬がいて、彼にはまったく手に負えないことをはっきりと示しているのだ。

「黒い驚異」「高貴な動物」「勇敢な馬」など、サイロックには馬として最高級の賛辞が送られているが、発明家を作った2頭の金属製の馬は、それらが現実には存在し得ないような「夢の乗物」のスピードを誇るゆえに、かえってジェシーの馬の速さを引き立たせる。最新の武器を装備したスティームチームに痛手を加えるような銃撃戦を戦い抜き、そのスピードにも負けない走りをするので、ジェシーの愛馬は、自らの優秀さと騎手としてのジェシーの達人ぶりをきわだたせている。

西部の無法者の物語がSF ダイムノヴェルと融合することで期待される効果は、一つに、キャラクタ

ーが「素晴らしい発明品」に負けない力を発揮することでその伝説化が加速されることである。ジェシーのような実在の人物が実名で登場する物語では、とくにその効果が顕著であるが、その伝説のリストには、愛馬さえも加わっている。

D. 映像に近いテキスト

ジェシーの物語は、20 紀には映画やテレビによってくり返し映像化されているが (Boggs 23-244), 発明家がジェシーを追跡するこの作品では、すでに映像作品の台詞のような、会話ばかりのテキストが随所にみられる。極限まで説明を省き、会話によって状況を浮かびあがらせようとしている。このような手法は、読物を気軽な娯楽として大衆に提供するというダイムノヴェル最大の命題から生まれたものであろうが、同時に、19 世紀後半に興隆したダイムノヴェルが 20 世紀最大の大衆向け娯楽ともいえる映画に橋渡しの役割を果たしたことを一面で裏づけるものでもある。ダイムノヴェルが、映画の題材ばかりか、その場面設定まで、影響を与えたのではないかと思われるのである。

たとえば、発明家とジェシー一味との激しい銃撃戦ののち、スチームチームをジェシーの愛馬が追走する場面では、発明家の「私」と彼が雇った探偵との間でつぎのような会話が交わされている。

大平原の長い平らな広がりの中へ私たちは飛ぶように走って行った。

「フランク」とブラスが叫んだ。

「なんだ」と私は聞いた。

「ジェシー・ジェームズがサイロックに乗ってついてきてる」

「わかってる」

「真横だ」

「見えてるよ」

「撃った方がよくないか」

「馬を殺さずに撃てるか」

「うん」

「それじゃ、やってみろ」

「おれの銃には弾が入ってないんだ」

「ピストルを使えよ」

「おれのはみんな空っぽだ。ピストルをくれ」

「私のピストルはもうやったじゃないか」と私は言った。

このような会話は、これが発明家の日記であるという冒頭の説明からすれば不自然ではある。日記には、自らが緊急時に他者と交わした会話をそのまま記録するとは思えず、むしろそのようなときに感じたことを記録すると思えるからだ。だが、同乗者のひとりが蜂の巣状に撃たれた直後、発明家一行が「飛ぶように走る」スチームチームで逃走する状況が読者との間で共有された場面の会話としては、余分な説明を廃することの臨場感がある。

その後、発明家とジェシーは、直接対決の殴り合いをしており、その合間にも同様の短い会話が続く。臨場感は、ピストルを撃った時に発する「パーン」という音や人を叩いたときの「ピシャ」などの擬音語が多用されることでも演出され、戯画的な度合いを強めてもいる。ダイムノヴェルの特徴の一つは、屋外におけるアクションの連続であるが、そのようなアクション場面における、極端に説明を排除した会話や擬音語の多用は、大衆の娯楽がダイムノヴェルのような活字メディアから映画のような電子メディアへ移行していく一つの兆しとみることもできよう。

E. 探偵としての発明家

最新の武器を装備したスティームチームによってジェシー一味と対決する発明家であるが、探偵としては目新しいことをするわけではない。基本的な行動としては、「追跡すること」と「覗き見すること」の2点に集約され、その意味では、「探偵小説の母」といえるメッタ・V・ヴィクターの探偵小説に登場するような素人探偵の域をでることはない（山口 5-46）。

発明家が雇った「ニューヨークでいちばん優秀な探偵」というふたりも同様で、彼らは発明家の従者以上の役割を果たしてはいない。その勇気が言葉では称えられ、発明家の「忠実な射撃名手」として働くが、その働きは、セナレンズのスティームマンの物語に登場するアイルランド人や黒人の従者とあまり変わることはない。発明家は、ライフワークといえる発明品と自らの命を危険にさらして探偵業務にあたることを主張して、報酬に関してはプロフェッショナルな交渉をしてジェシー一味の追跡を始めているが、彼自身も、彼を補助すべき探偵も、探偵らしい優秀さを発揮しているとはいえない。そのことは、何度も直接対決しながらジェシー一味を捕まえることができず、その逃亡を許してしまう結末に集約されている。

しかし、発明家が「追跡し」「覗き見する」という、ダイムノヴェルの探偵に共通する基本行為に徹することによって、探偵がジェシーに騙されていた女性を救うというプロット上の展開が生まれるばかりでなく、探偵をとおしてジェシーの肉声や素顔を読者に伝えるという手法上の効果が生まれている。実在の人物を実名のままフィクション化しているなかで、その人物像を自由に描いて読者の興味を誘うという副産物が生じているのである。

発明家が探偵として「覗き見する」ジェシーは、優秀な馬を乗りこなす、乗馬の達人としての側面が強調される一方で、幾多の伝説にあるような義賊の側面を示すことはない。ジェシーは、ピンカートン探偵社の追跡から自分たちを守ってくれなかったという理由で「平穏で静かな小村」を襲撃し、何人も殺害して弱い女性や子どもたちを「絶望の苦しみ」に陥れている。貧民を襲うことはまれで、「実入りのいい銀行の金庫室」や列車から強奪することが多いといわれるジェシーが、「略奪よりも復讐のため」に、「激しい怒りにかられて」寒村を襲撃する様子が描かれている。

J・ランドルフ・コックスは、ジェシーが、社会一般の評判とは異なり、ダイムノヴェルでは、必ずしも、権力者に反抗し貧民に施すという、ロビン・フッド的イメージで描かれていないと述べている(143)。ジェイムズ・I・ドイチも、ジェシーが「聖人」と「悪魔の化身」の二面をもって描かれていると指摘している(2)。発明家が「覗き見する」ジェシーには、資本主義の名のもとに巨富を貪る銀行や鉄道会社などを襲い、貧者にやさしいという、新聞記事などが作りあげたような義賊のイメージはみられず、いわばその悪の部分強調されている。

ジェシー自身は発明家に「社会を守るためにはお節介も辞さない」と言っているが、そのような姿がじっさいに描かれることはない。「しわがれた」「恐ろしい」声で部下たちに命令をくだしたり、彼に父親と兄弟を殺害されたという男性を「20発もの銃弾で撃ち抜いて」その復讐を阻止したりする残虐な姿などが描かれている。「今までたくさんのならず者に会ったことがあるが、このミズーリの大盗賊団のようなならず者に会ったことはない」という発明家の感想どおりの姿が描かれているのである。発明家のこのようなジェシー評がふたりの対決色を深めていることはいうまでもない。

ジェシーによる大資本家批判がまったくみられないわけではなく、発明家に対して直接その批判を口にする場面もある。ジェシーは、牧場主に変装して発明家の前に現れ、その変装を見破られると、発明家が鉄道会社に金で雇われてオオカミ退治するかのよう自分を追跡していることを非難し、その金を「血に汚れている」と言う。探偵が犯人の変装を見破り、じかに対峙する状況であれば、現実では話す間もなく決着がつくはずであるが、発明家とジェシーは暴力行使に及ぶ前に延々と会話をしている。こ

の不自然ともいえる状況は、20世紀の映画やテレビなどでも頻繁にみられるが、追跡される犯人に心情を吐露する機会を与えて、犯人の人物像を明らかにしようとするためである。発明家のスティームチームが大平原の動植物を押し潰して進む様もくり返し描写されているが、「血に汚れた金でおまえがここにいるのだ」というジェシーの発明家への発言は、鉄道会社のような大資本が西部に導入されることによって変化を遂げることに對するジェシーの失望感が表れている。発明家は追跡される原因を作ったのはジェシー自身であることを明言しているが、ジェシーが読者の同情を得る一端が表れている場面ではある。

「実利的な機械工」であることを自認し、「生涯を発明に捧げる」ことを決意している発明家が、探偵となって西部にでかけるという設定は、じっさいのところ不自然ではある。研究に没頭する内向きな性格と冒険を好む外向きな性格とが同時にひとりの人物に同居しているわけだが、その部分がまったく説明されていないからだ。この問題は、発明家の冒険旅行というかたちをとるSFダイムノヴェルに概していえることではある。エリスのスティームマンの物語のように、少年発明家による冒険旅行では少年らしい夢を実現させる一度の機会という点で説得力をもって、著名な発明家のフランク・リードやその息子が壮大な発明品をいつ作るかもわからず次つぎと作っては冒険に挑み、大金を手にするというのは、物語をシリーズ化するうえでは便利でも、果てしない空想の世界の設定ではある。

しかし、そのような空想の世界だからこそ、読者の想像力をかりたてる、娯楽作品が生まれたともいえる。ジェシーは発明家たちが鹿狩り中にスティームチームを乗っ取り、「技術と熟練が必要」とされるその操作を見事にやり遂げる。大切な武器である発明品を乗っ取られるということは、探偵が評判どおり優秀であれば生じないことであり、筋書きとしても安易ではある。けれども、そのような展開においてこそ、もしジェシーが最新のテクノロジーを駆使したら、どのようなことになるか、という、読者にとっては夢のような話が生まれている。「愚か者は機械を発明して、賢者はそれを使う」と言い、ジェシーは、自らが「今まで作られたもっともすばらしい機械」と呼ぶスティームチームを走らせる。スティームチームは、結局、ぬかるみにはまって、ジェシーはそれを己の利益のために使うことができないが、最強の無法者が「史上最高の発明家」による最新機器を操作するという、読者にとって夢のような話がくり広げられるのである。

新奇な機器を次つぎと生みだし、西部開発を推進する鉄道会社の依頼を受けて無法者を追跡している発明家は、資本主義体制の主流にいる人物といえ、その発明品と無法者との対決はもう少し掘り下げられるべきではある。ジェシーの「血に汚れた金」という発言に代表される、資本主義体制への批判との矛盾もあり、折角の対決が未消化に終わっている感は否めない。それでも、ダイムノヴェルの読者を喜ばせる対決ではあろう。ジェシーは、「蒸気や電信、優秀になった探偵、その他もろもろの発明品をものともしないで」、「ストライキ参加者たちが達成できなかった」地位をダイムノヴェルのなかで獲得していたのである（Slotkin 138）。

ウィラ・キャザーの『私のアントニア』（1918）の冒頭、10歳の少年ジム・バーデンは、ヴァージニアからネブラスカへ向かう列車のなかで、「ジェシー・ジェイムズの生涯」という本を買ってもらい、「今まで読んだ本のなかでいちばん読み応えがあった本」（4）という感想を述べている。しかしこの少年は、その後、大平原で生活すること自体が、どの冒険物語よりもスリルに満ちた冒険であることを実感するようになる。西部の現実をよく知らないと思われる作者が、まったく知らない読者に向けて書いた発明家の西部冒険旅行の実態は、ジム少年が経験するような自然の脅威のすさまじさのなかで生き残るスリルではなく、大平原を背景としてくり広げる銃撃戦を生き残るスリルである。西部という空間が、無法者などを敵として戦うという意味での冒険の場として象徴化され、スティームチームのような「すばらしい発明品」は、その戦いをよりスリルに満ちたものにするための道具として利用されているのである。

V. ダイムノヴェルから『アーサー王宮廷のヤンキー』へ

A. キャメロットのスティームマン

トウェインの『アーサー王宮廷のヤンキー』には、SFダイムノヴェルの影響が顕著に表れている。トウェインは、『ハックルベリー・フィンの冒険』（1884）を執筆後、数多くのアメリカ西部の冒険物語を読んでおり、『アーサー王宮廷』は、それらのパロディとみることも可能である（Pfitzer 42）。主人公のハンク・モーガンは、コネティカット出身の生粋のヤンキーで、機械工としての知識や技術を武器として見知らぬ遠隔地にでかけ、現地の人びとに異常なる「脅威と恐怖」を与えてその征服者となる。そして最終的には、自らの発明品すべてを爆発させて戦いに挑み、その「スリルに満ちた、驚くべき、類のない冒険旅行」から帰還している。

ハンクが赴くのは「大なる西部」ではなく、彼は好んで冒険旅行にでかけていくわけでもないが、主人公の設定やその基本的なプロットなどにおいて、『アーサー王宮廷』は、SFダイムノヴェル、とくにエリスの『大草原のスティームマン』と類似している。いずれの物語においても、アメリカ人の科学技術は、「アレキサンダー大王のように世界を征服する」強力な武器となり、白人種によるアメリカ文明の拡大・浸透を推進することになるのである。

ハンクは19世紀のコネティカット州ハートフォードから、6世紀のアーサー王の宮廷に移動するが、その冒険旅行の全容は、彼が日々つけていたという日記によって明らかにされている。時間的に隔たりがある出来事を過去の日記によって現代の読者に提示するというこの形式は、前章で扱った、作者不明の『フランク・リード、スティームチームでジェイムズ一味を追跡する』のそれと同じである。その日記がいわゆる日記の形式ではなく、「私」が語る物語になっていることについても、両者は同様の特徴を示している。

ハンクは、ヤンキーの機械工であるという点において、エリスが『大草原のスティームマン』で描いたコネティカット出身のヤンキー、イーサン・ホプキンズと、スティームマンを製作した発明家のふたりをあわせたような人物である。エリスは、ともに西部を探検するアイルランド人の対照として、イーサンをたえずヤンキーと呼び、その「実利的な目」や「ハートフォードのコルト製ピストル工場」での経験などに言及する。ヤンキーとは、元来、ニューヨークのオランダ移民がコネティカットの英国移民を指して用いた呼称であるが、ハートフォードの兵器工場の現場監督で、きわめて「実利的で」「現状に注意を払い、それを最大限に活用する」⁵というハンクは、『大草原のスティームマン』におけるイーサンのヤンキーとしての性格づけと呼応する。ハンクをコネティカット出身のヤンキーにするという発想は、ヤンキーであることが強調されているイーサンからヒントを得たといえるのである⁶。

ハンクは、小銃や大砲などの武器類をはじめ、ボイラーやエンジンなど、「労働を節約するためのあらゆる機械を作ることができる」と豪語し、スティームマンを作りだした天才発明家につうじる性格を示している。「人間が必要とするものならばなんでも作ることができ」、「さっと作りだす新しい方法がなくても、その方法を工夫して作りだすことができる」というハンクの宣言は、彼がエリスの発明家ばかりか、フランク・リードやその息子など、「史上最高の発明家」とうたわれ、数々の発明品や武器を作ってアメリカ西部や世界各地にでかけていったエントンやセナレンズの発明家にも連なっていることを示している。

ハンクのアーサー王宮廷への登場は、スティームマンがアメリカ西部に現れた時のような驚きと恐怖をもって迎えられ、いわば、彼自身がスティームマンそのもののイメージで描かれている。パールで殴られたことで1300年の時間をさかのぼることになるハンクは、たどり着いた英国では「この奇怪なる巨人」「この恐ろしき雲つくばかりのモンスター」「この牙をはやし、爪を伸ばした人食い鬼」などと呼

ばれ、その巨大なるモンスターぶりが強調されている。彼を初めて見た人の反応についても、「口をあぐりとあけ、おびえて目を大きく見開き、恐怖にとりつかれながらも、驚くべき好奇心にとりつかれているよう」と描写され、彼が6世紀の英国で「大した見世物」として巻き起こすセンセーションは、スティームマンがアメリカの大草原に現れた時のようである。ハンクは、いわば、アーサー王の宮廷があったというキャメロットの町にとつぜん現れる巨大なるスティームマンとして描かれているのである。

スティームマンは蒸気機関車のしくみで走るため、「口か、頭のとっぺんから黒い煙を吐く」が、ハンクがパイプを吸う姿は、かぎりなくこのスティームマンの姿を連想させる。かぶった兜の間から「黒い煙」が噴きでるさまは、「火を吐くドラゴン」のようで、ハンクは見る人に恐怖を抱かせている。SFダイムノヴェルが描くスティームマンは、「すばらしい発明品」として、その大きさや威力が強調され、アメリカ文明を誇示するものである。ハンクは、キャメロットにおける自分を「ピグミーのなかの巨人」「子どものなかの大人」「知的モグラどものなかの知の巨匠」などと呼ぶが、鉄製の甲冑にその大きな身体を包んで黒いパイプの煙を吐き出すことで、文字どおり、キャメロットのスティームマンとなっているのである。

B. 白いインディアン

ハンクがSFダイムノヴェルにヒントを得て創造されたと思われるのは、彼の英国人に対する反応にも表れている。彼は、6世紀の英国人を一貫してネイティヴ・アメリカンになぞらえ、ダイムノヴェルが先住民を描いていたような視線で古代をとらえている。一流の貴婦人や紳士が集まっているというアーサー王の宮廷で使われる言葉が、多くは「コマンチ族のインディアンさえもそれを聞いたら顔を赤らめるようなものばかり」であると言い、宮廷の人びとを「白いインディアン」とさえ呼んでいる。アメリカ西部の先住民が「赤色人」と呼ばれていたことに対応して「白い」という形容詞をあてているのである。

ハンクが6世紀の英国人をアメリカ西部の先住民に譬えることは、彼にとっては、古代の人びとが「精神的訓練や知的強靱さ」とは無縁の「野蛮人」にみえるということである。ハンクの英国人に対する視点をとおして、19世紀のアメリカで、多くの白人が、あるいはトウェイン自身が、先住民に対して抱いていた意識が集約的に示されているのである。ハンクは6世紀の屈強の男たちが、長く固い髪をとかしもせず顔の前にたらしめている姿を見て「まるで獣のようだ」と思う。そして、すぐその後に、彼らの「多くが鉄の首輪をはめていること」に言及して、古代人の獣性とネイティヴ・アメリカンとを暗に結びつけている。鉄の首輪は、ネイティヴ・アメリカンを奴隷化するために使われた歴史があることからすれば (Carpenter 174)、古代の英国人は、作品冒頭からネイティヴ・アメリカンに譬えられていることになる。

その譬えは、その後食習慣にも及び、ハンクは、英国人が出発前にたくさん食べて旅の途中の長い断食に耐えることについて、「インディアンやアナコンダのやり方と同じようだ」と揶揄している。インディアンの食習慣をアナコンダのそれと同一線上でとらえ、その比喩をさらに英国の貴婦人にまで適用している。旅行中の貴婦人が「朝食にありつこうといらだつ様子をみせない」として、彼女を野蛮人呼ばわりしているのである。

宮廷内の既婚の王女や公爵夫人たちの婚姻関係についても、野蛮人とネイティヴ・アメリカンとの結びつきでとらえられている。ハンクは、高貴な女性たちの婚姻関係が「武勇に優れた男性」によって容易に左右されることを、ネイティヴ・アメリカンのそれに譬えて説明している。ハンクによれば、アーサー王の宮廷は「一種の洗練されたコマンチ族の宮廷のようで」、その男女関係は、「頭の皮をいちばん多く腹帯に結びつけたインディアン男のもとに逃げていこうと待ち構えていないインディアン女などいない」と同じだという。エントンのスティームマンの物語では、インディアン女性への強い偏見をも

って白人との異人種間結婚が描かれていたが、ハンクも同様の偏見を示す。そして、宮廷の男性を「インディアン男 (buck)」, 女性を「インディアン女 (squaw)」に譬えて蔑みつつ、ハンクは、高貴な既婚女性が男性の武功次第で簡単に夫を変えていくことに言及して、アーサー王の宮廷をアメリカ西部の先住民の世界と結びつけている。

じっさい、ハンクが初めてキャメロットで目にするのは、「羽飾りのついた兜、光り輝く鎧、ひるがえる旗さしもの、色鮮やかな胴着や馬衣、金色に塗った槍の穂先などに彩られた栄光あふれる高貴な騎馬の一隊」で、そのいでたちの色鮮やかさなどが、戦闘に挑むネイティブ・アメリカンの姿を彷彿させる。一隊が縫って行くのは、「馬糞や豚、裸の餓鬼ども、はしゃぎまわる犬たち、みすばらしい小屋」などで、インディアン部落のようでもある。また、円卓の騎士たちは、カーボーイと呼ばれ、少年のような冒険をいつまでも求めているとされている。『アーサー王宮廷』で描かれる6世紀の英国は、SFダイムノヴェルが描いていたような、19世紀のアメリカ西部と読みかえることができるのである。

C. 魔法のテクノロジー

『大草原のスティームマン』において、主人公の天才少年発明家、ジョニー・ブレイナーの発明の才能は不可能を可能にする「魔法」の働きをしているが、同様のことが『アーサー王宮廷』でも生じている。身体の不自由なジョニーが、自らの発明品によって夢の冒険旅行を実現させ、旅行中の困難を乗り越えたとすれば、ハンクは、19世紀の科学技術や知識を6世紀の人びとに「魔法」として示すことで、国王につぐ第2の地位を獲得している。日蝕についての知識を最大限に生かし、太陽さえ魔法によって操作できる「偉大なる魔術師」と思わせることで「ボス」という地位を獲得すると、ハンクは、19世紀の科学技術を次つぎに使って国家を征服する。1300年以上の知恵の積み重ねを最大限に生かして、6世紀の英国に19世紀のアメリカを再現しようとするのである。

古代の人びとを「白いインディアン」と呼んでその文化を揶揄しているハンクであれば、彼の行為は、西部への侵略を続けた19世紀アメリカの姿と相似形でとらえることができる。SFダイムノヴェルでは、発明家が「すばらしい発明品」で先住民を殺害し、同時に一攫千金の夢をかなえるが、『アーサー王宮廷』のハンクは、「発明し、工夫し、創造し、改造する」機械工としての能力を魔法として使うことで、社会的地位を獲得するばかりでなく、アメリカ文明の拡大・浸透をはかっているのである。

アメリカ文明の拡大・浸透は、「将来の巨大なる工場の土台」、あるいは「鉄と鋼の未来文明の伝道師」としての多様な産業に、ハンクが着手することから始まる。ハンクは、あらゆる種類の手工業や科学的職業の熟練者を育成し、さらには「教員工場」や日曜学校を開設することで、「19世紀の文明を開花させていく」。SFダイムノヴェルでは、エジソンの発明工場のイメージを背景に、発明家が自宅の実験工場で魔法の発明品の創作に挑む姿が描かれるが、『アーサー王宮廷』においても、「秘密工場」「巨大工場」「人間工場」など、ハンクが指揮する多様な工場が多様な魔法の品やシステムが生みだされていくさまが描かれている。ハンクはやがて、電信、電話、蓄音器、タイプライター、ミシンをはじめ、蒸気や電気の機器類、蒸気船、蒸気軍艦、蒸気商船までも普及させ、果ては、共和国をも誕生させて、その初代大統領になることまでも望むようになる。SFダイムノヴェルの魔法の発明品が先住民を殺戮し、西部を侵略したように、ハンクがもちこむ19世紀のアメリカ文明が、6世紀の英国を侵略する姿が描かれている。

「偉大なる魔術師」としてのハンクは、「嵐や稲妻、地獄にいるすべての悪魔たちを自由にあやつることができる」という魔術師のマーリンと対決することで、その能力をセンセーショナルに示すことになる。この伝説の魔術師は、ハンクとの対決の一場面、快晴の日に嵐や稲妻を起こすことに成功するが、これに対してハンクは、密かに爆薬をしかけてマーリンの塔を爆発させる。マーリンと同様に、呪文を唱えるような演技をして爆発が魔術で起こるようにみせかけながら、爆薬の力によって古塔を天空

に飛び散らせている。爆発は、「火山の大爆発のように火がたちあがり、夜は昼に転じて、度肝をぬかれて地面にひれ伏す千エーカーにも及ぶ群衆の姿を照らしだしている」。

強力な破壊力をもつ爆薬、ダイナマイトは、アルフレッド・ノーベルによって発明され、1867年から翌68年にかけて英国、スウェーデン、アメリカで特許が与えられて生産量を増やしていた、いわば19世紀の発明品である（Fant 134-35）。ハンクは、19世紀の科学技術をもって伝説のマーリンの魔術と対決し、後者のそれが「ちゃちなお座敷手品のよう」であることを6世紀の人びとに認識させている。ハンクはここでも、SFダイムノヴェルの発明家とその最新の発明品をもって先住民を圧倒するように、英国人をきわめてセンセーショナルな方法で圧倒している。

D. 冒険旅行とその結末

トウェインが『アーサー王宮廷』を書くにあたってSFダイムノヴェルを意識していたことは、作品全体に冒険旅行のモチーフが表れていることから読みとれる。ハンクが19世紀から6世紀の世界へさかのぼること自体も冒険旅行とみなすことができるが、そのさかのぼった世界においても、「冒険を求めるヤンキー」「ヤンキーと国王のお忍びの旅」などの章タイトルが示すように、彼が冒険の旅にでかける様子が描かれている。トマス・マロリーの『アーサー王の死』（1485）を下敷きにして円卓の騎士たちなどについて描くことは、当然ながら、冒険や探検のテーマを追求することではある。

しかし、円卓の騎士たちが語る冒険談を聴いたハンクが、それらを「殺人的冒険」と呼び、その冒険が仕返しやいさかいに決着をつけるための略奪行為ではなく、両者の間に攻撃の原因など存在しない「見知らぬ同士の果たしあいにはすぎない」という印象を述べる時、円卓の騎士たちの冒険談は、SFダイムノヴェルが描く西部への冒険と重なることになる。円卓の騎士たちが語るのが、捕虜たちが捕えられ、捕虜に味方する友人や後援者が殺される、という内容であることで、なおダイムノヴェルが描く冒険物語との距離が近くなる。ハンクが円卓の騎士が語る冒険談を、「おまえのことをたたきのめしてやるぞ」といった、道で偶然出会った少年同士の喧嘩に譬えることで、作者の揶揄が騎士たちばかりか、ダイムノヴェルの描く世界へも向けられている。

ハンクの6世紀への旅は、その結末においても、SFダイムノヴェルとの近似をみることができる。自ら作りだした発明品を武器として敵を「皆殺し」にして帰還を果たすという意味においてである。ハンクは、貴族や特権階級、「国教」も存在しない、すべての人間が平等で、信仰も自由な共和体制の発足を宣言するも、結局は、「共和国をぶつつぶせ」と叫んで進軍してくる「オール・イングランド」と戦うことになる。『大草原のスティームマン』において、発明家のジョニーがスティームマンを爆発させて先住民を壊滅状態にさせたように、ハンクは、自ら作りあげた「文明工場」のすべてを爆発させ、死体の判別もできない「恐ろしい殺戮の凶」を生みだし、自ら生き延びている。その殺戮の凶は、「命の破壊力は驚くほどほどで、死者の数など数えることができず、死体も個人として存在することはなく、ただ、同じ種類の原形質が鉄や金属粒の合金とともにあるのみだった」と説明されている。

ハンクが勝利する戦いは、「サンドベルトの戦い」と呼ばれている。数えきれないほどの旗さしものをひるがえし、羽根飾りをつけ馬に乗って進軍する英国軍の様子は、ネイティヴ・アメリカンを連想させ、この戦いは、サンドベルトという戦いの名前とともに、アメリカの西部でじっさいに起こった「サンドクリークの大虐殺」を連想させる。この連想は、ハンクがいち早く6世紀の英国人を「白いインディアン」と呼んでいることを考えれば、きわめて信憑性をおびる。トウェインは、1864年、コロラド地方でアメリカ政府が無抵抗の先住民に対して行った大虐殺を念頭において、ハンクをサンドベルトの戦いに挑ませたといえる。古代の英国人は、ハンクの冒険旅行の最終段階においても、アメリカ西部の先住民と結びつけられているのである。

ハンクは、結局、自らの工場で育てた50余名の少年兵とともに、英国の支配者となるが、その戦い

方は、エリスばかりか、エントン、セナレンズなどのスティームマンの物語における戦い方そのものである。サンドベルトの戦いで、「命のあるものはどこにもいなかった」という状況を作りながら、ハンクは騎士を「皆殺し」にしなければ仕事は完成しないと言い、鉄条網をいくつもめぐらせて電気をとおし、さらにはリボルヴァー、ガトリング砲などを総動員して大量殺人に及ぶ。ハンクが十代の少年たちとともに、短時間に数万人も殺すにいたるこの戦いは、使用される各種の強力な武器においても、その戦い方の過激さにおいても、SFダイムノヴェルにつづるものである。ハンクとダイムノヴェルの発明家たちは、より高度な機械文明を善としてとらえ、その高度な科学技術を「生命の最大の破壊力をもつ」殺人兵器にして大量殺人を行うという点で共通している。

ハンクは「英国の主人」のままではいられず、その後騎士の一人に刺されるも、マーリンの魔法によって19世紀へ戻り、冒険旅行を終えている。ハンクの冒険旅行は、時空をこえる度合いが大きく、その侵略行為も過激で広範囲に及ぶが、自らの発明品を誇示して先住民を驚かせ、大量殺戮して帰還するというその基本において、SFダイムノヴェルの発明家たちの冒険旅行と同様のパターンを示している。ハンクの帰還は、SFダイムノヴェルの発明家たちのように無邪気な希望に満ちたものではなく、彼は、帰還後、自ら作りだした文明に破壊される近代戦争の首謀者のように、せん妄状態のなかで死んでいる。その最期は、高度な機械文明を過激な侵略行為に用いたつけを自ら支払うかたちになっていて、そこには、SFダイムノヴェルにはみられない、アメリカ社会への批判が強く表れてはいる。それでも、ハンクの6世紀への旅が、SFダイムノヴェルの冒険旅行のパターンを踏襲していることに変わりなく、トウェインにとっては、時空をこえることで、先住民に対する差別意識を示しながらも、機械文明礼賛の姿勢をつらぬくアメリカの現代を批判することができたということであろう。

トウェインは、当然ながら、SFダイムノヴェルのみの影響下に『アーサー王宮廷』を書いたのではない。マロリーの『アーサー王の死』はいうまでもなく、アルフレッド・テニソンの『国王牧歌』(1859-64)をはじめ、ウォルター・スコットの『アイヴァンホー』(1820)やマックス・アドラーの短編「幸運な島」(1882)など、トウェインが参考にしたと思われる作品は、数多く指摘されている(大久保563, Altman 1-7)。偉大なる芸術家が大いなる剽窃者でもあることはときに真であり、トウェインは、『アーサー王宮廷』の創作にあたっては、とくに多くの作家から影響を受け、そのアイデアを借用したと思われる(Altman 1)。

しかし、そのなかで、SFダイムノヴェルの影響については、ほとんど無視されてきたと言ってよい。グレゴリー・M・ファイツァーが指摘するように、『ハックルベリー・フィン』を発表後、多くのウェスタン小説を読んで「インディアンたちのなかのハック・フィンとトム・ソーヤー」を執筆していたトウェインが、当時の社会情勢などを考慮してその完成を断念し、そのテーマをそのまま『アーサー王宮廷』に移行したとすれば(49)、この作品におけるSFダイムノヴェルの影響はより信憑性を帯びる。『ハックルベリー・フィン』でさえ、「流血と暴力を求める読者層に向けて大量にでまわっているダイムノヴェルと変わらない」と評するものがあるなかで、トウェインは、未完の作品で描いていたダイムノヴェルの暴力シーンを6世紀の外国に移して描いたといえるのである(Pfitzer 45)。

「インディアンたちのなかのハックとトム」は、エリスから、エントン、セナレンズと続くスティームマンの物語の、少年による西部探検のパターンを踏襲した作品である。その主要プロットは、先住民による移民一家の惨殺と美女の捕囚、そしてその救出に向けての追跡で、それらが、『ハックルベリー・フィン』の結末に続くハックとトムの経験として描かれている。ハックとトムには、SFダイムノヴェルの少年たちと異なり、スティームマンのような「すばらしい発明品」はなく、ふたりは、自由黒人となったジムを従者として、5頭のラバを仕立てて西部の大草原地帯に赴いている。

一行が西部旅行で期待しているのは、「インジャンたちのなかでの生活はまったくサーカスみたいなもんだ」(35)というトムの言葉どおり、SFダイムノヴェルの少年発明家たち同様に冒険である。じっ

さい、当地での白人と先住民との攻防はSFダイムノヴェルのように過激で、「クーパーの小説」を読んで、インディアンが「世界でいちばん高貴な人間だ」(35)と考えていたトムは、「本のインジャンとほんもののインジャンとは違うのだ」(47)と認識するにいたっている。トムは、『苦難をこえて』におけるトウェイン同様、「クーパーの信奉者、赤い民族の信奉者」から、彼らに「嫌悪の情」を抱くまでになったといえる(169)。結局、「インディアンたちのなかのハックとトム」は、当初から「インジャンはものすごくたちが悪い」(34)と確信していたジムの「正しさ」を証明するかたちで未完のまま終わっている。

ハックとトムの探検旅行では、大平原という空間での飢餓の危険や孤独、自然の脅威なども詳述され、SFダイムノヴェルにはみられないリアリスティックな描写が顕著である。しかし、そのリアリズムをもって先住民の白人への裏切りや残虐な大量虐殺が描かれ、白人が先住民を敵対する意識としては、SFダイムノヴェルに引けをとることはない。高い機械文明によって先住民を征服するというダイムノヴェルのような姿勢はみられないものの、過激な殺人描写が多かったスチームマンの物語でも決して描くことのなかった、先住民による若い白人女性へのレイプの危険性を詳述しており、この点がトウェインが作品を完成することができなかった原因の一つと考えられる。

アメリカの西部を「改革の可能な地域」としてとらえ、過激な暴力シーンがあふれるダイムノヴェルに異をとらえていたアンソニー・コムストックら「お上品な伝統」を重視する人びとの反対を、トウェインが意識していたのではないかと、ということである(Pfitzer 49)。コムストックは、SFダイムノヴェルが子どもたちに「立派な家庭から家出して、西部で金持ちになって成功する」よう激励するが、そこでは「子どもたちは必然的に『少年盗賊』か『小さな悪人』に墮落していく」(32-33, Pfitzer 45)とみなしていた。まさに、エリスからエントン、セナレンズに続くスチームマンの物語が描いていた世界を批判していたのである。

発明家の西部探検を描く物語は、たとえばセナレンズのスチームマンの物語を例にとっても、先住民殺害をセンセーショナルに描写してはいたが、それでも捕囚された美女については、無垢のまま救出され結婚にいたるハッピー・エンディングを描いていた。それに対して、「インディアンたちのなかのハックとトム」では、先住民による白人の惨殺シーンばかりでなく、白人女性への集団レイプの可能性まで描いている。過激なSFダイムノヴェルでさえ踏み込まなかったタブーを描いているのである。若い娘を捕囚した先住民たちのあとを追うハックらがさらに描かれれば、そのタブーはさらに追求されなければならないところで作品は途切れている⁷。

トウェインは、これらの過激な内容が「お上品な伝統」の信奉者の反対を呼ぶと考えて執筆を断念し、数年後、『アーサー王宮廷』の過激なシーンへと転換させていったのかもしれない(Pfitzer 49)。当時人気のSFダイムノヴェルのパターンを踏襲した自身の作品を、『アーサー王宮廷』のような、1300年前の英国へタイムスリップするというサイエンス・フィクションにすることで、未完の作品では描けなかったアメリカを描こうとしたのだろう。1300年さかのぼった世界では、先住民の習慣などが英国人のそれに譬えられ、捕らわれの乙女の救出などが、円卓の騎士の冒険談として語られたり、花嫁の捕囚、地下牢の拷問、虐殺などが、ハンクが英国で遭遇する出来事として描かれている。ハックの西部旅行とハンクの英国旅行は、ともに見知らぬ地域への冒険旅行というSFダイムノヴェルのパターンを用いているのだが、前者の場合のようにリアリズムをもっては描けなかったアメリカが、時空をこえた後者の旅行で描けたということであろう。

SFダイムノヴェルは、クルートらによる『サイエンス・フィクション百科事典』によれば、一般に認識されているよりも大きな影響をその後のサイエンス・フィクションに与えたという(336)。初期の pulp マガジンのSF冒険ものは、ただたんにSFダイムノヴェルを大人向けに移行しただけ、という指摘とともに、具体的作品へのSFダイムノヴェルの影響が多々指摘されている(336)。「20世紀への

転換期でもっとも人気を得た児童文学書」(Mott 224)で、その後映画や舞台などでも人気を持続している、L・フランク・ボームの『オズの魔法使い』(1900)も、不思議な世界への冒険旅行という点で、SF ダイムノヴェルの延長戦にある作品といってよい。しかし少女を主人公とするSFは、カンサスの大草原を背景としていながらも、先住民が登場することもなく、主人公が国家の膨張主義を反映するような侵略的な行為に及ぶこともない。SF ダイムノヴェルが20世紀のサイエンス・フィクションに与えた影響とその差異は、同時代の作品に与えた影響とその差異などとともに、今後さらに詳しく追求されるべき課題ではある。

〈注〉

1 「アメリカのジュール・ヴェルヌ」と題する記事による。セナレンズは、数百に及ぶダイムノヴェルを書いたといわれるが、そのうち約300は、少年発明家フランク・リード・ジュニアやジャック・ライトによる探検物語である (Landon 198)。

2 「フランク・リード・ライブラリー」についての説明は、第1号の裏表紙に印刷された宣伝文による。

3 ナサニエル・ウィリアムズは、セナレンズがキューバ系アメリカ人であったことに着目して「フランク・リード・ライブラリー」の作品を分析し、彼が「ときに明確なステレオタイプをこえたアフリカ系アメリカ人像を描くことができた」と述べている (291)。

4 ジェシーと馬との関係については、「ジェシー・ジェイムズとその馬」による。

5 『アーサー王宮廷』の引用部分の日本語訳については、大久保博訳、龍口直太郎訳を参照。

6 ハンクのモデルについては、たとえば、モーガンという姓や出身地、その組織力にたけた性格や経歴などから、ハートフォード出身の大銀行家、J・P・モーガンが指摘されている (Rasmussen 779)。また、先住民の世界を文化人類学的に調査し、『古代社会』(1877)を著した、ルイス・ヘンリー・モーガンなども、トウェインの脳裏にあったのではないかと思われる (和栗 1-13)。作家が一つの影響下でキャラクターを創造するとは考えられず、トウェインは、これら実在のモーガンも意識していたと思われる。

7 リチャード・アーヴィング・ドッジは、軍人として先住民と長きにわたって間近に接した経験から、合衆国の数あるインディアンの部族のいずれにおいても、捕虜となった女性の身体を自由にする権利を捕獲した者が有していたと書いている (529)。

〈引用文献〉

“An American Jules Verne.” *Amazing Stories* 3 (1928): 270-72. Print.

“An American Jules Verne.” *Science and Invention* 8 (1920): 622-23, 665. Print.

Altman, Evan. “Twain’s *Connecticut Yankee* and the Question of Plagiarism.” Web. 3 Mar. 2013.

Ashley, Mike. *The History of the Science Fiction Magazine, 1926-1935*. Vol. 1. Chicago: Henry Regnery, 1974. Print.

アシュリー, マイク 『SF雑誌の歴史 パルプマガジンの饗宴』 牧真司訳 東京創元社 2004年

Baldwin, Neil. *Edison: Inventing the Century*. Chicago: U of Chicago P, 2001. Print.

Bleiler, Everett F. 〈1〉 Introduction. *Eight Dime Novels*. Ed. Bleiler. New York: Dover, 1974. vii-xv. Print.

———. 〈2〉 *Science-Fction: The Early Years*. Kent, OH: Kent State UP, 1990. Print.

Boggs, Johnny D. *Jesse James and the Movies*. Jefferson, NC: Mcfarland, 2011. Print.

Boostin, Daniel J. *The Americans: The Democratic Experience*. New York: Random, 1973. Print.

Brown, Bill, ed. *Reading the West: An Anthology of Dime Westerns*. Boston: Bedford/St. Martin’s, 1997. Print.

- Carpenter, Roger M. *American Indian History Day by Day: A Reference Guide to Events*. Santa Barbara: Greenwood, 2012. Print.
- Cather, Willa. *My Antonia*. 1918. Boston: Houghton, 1954. Print.
- Clute, John. "Yore Is With Us." Web. 25 Jan. 2013.
- , and Peter Nicholis, ed. *The Encyclopedia of Science Fiction*. London: Little, 1993. Print.
- Comstock, Anthony. *Traps for the Young*. Cambridge: Belnap P of Harvard UP, 1967. Print.
- Deutsch, James I. "Jesse James in Dime Novels: Ambivalence Towards An Outlaw Hero." *Dime Novel Round-UP* 45.1 (1976) : 2–11. Print.
- Dodge, Richard Irving. *Our Wild Indians: Thirty-Three Years' Personal Experience Among the Red Men of the Great West*. Hartford, CN: A. D. Worthington, 1883. *Google Book Search*. Web. 7 May 2013.
- Ellis, Edward S. *The Huge Hunter, or, The Steam Man of the Prairies*. 1868. Milton Keynes: Dodo, n.d. Print.
- Evans, Sara M. *Born for Liberty: A History of Women in America*. New York: Free, 1997. Print.
- Fant, Kenne. *Alfred Nobel: A Biography*. Trans. Marianne Ruuth. New York: Arcade, 1993. Print.
- Frank Reade, The Inventor, Chasing the James Boys With His Steam Team*. Brown 359–506.
- Green, Marin. *The Robinson Crusoe Story*. University Park: Pennsylvania State UP, 1990. Print.
- Guinan, Paul, and Anina Bennett. *Frank Reade: Adventures in the Age of Invention*. New York: Abrams Image, 2012. Print.
- "Jesse James and His Horses." Web. 6 Feb. 2013.
- Landon, Brooks. "Dime Novels and the Cultural Work of Early SF." *Science Fiction Studies* 36 (2009): 198. Print.
- Maxim, Hiram Percy. *Horseless Carriage Days*. New York: Dover, 1962. Print.
- Melville, Herman. *The Confidence-Man: His Masquerade*. 1857. Ed. Hershel Parker and Mark Niemyer. New York: Norton, 2005. Print.
- Moskowitz, Sam. *Explorers of the Infinite: Shapers of Science Fiction*. Cleaveland, OH: Meredian, 1963. Print.
- Noname (Enton, Harry). *Frank Reade and His Steam Man of the Plains; or, the Terror of the West*. 1876. New York: Tousey, 1892. Print.
- (Senarens, Luis P). *Frank Reade, Jr., and His New Steam Man; or the Young Inventor's Trip to the Far West*. 1879. New York: Tousey, 1892. Print.
- . *Frank Reade, Jr.'s Electric Air Canoe, or, The Search for the Valley of the Diamonds, A Thrilling Story of Adventures in Brazil*. New York: Tousey, 1892. Web. 5 Jan. 2013.
- Pfitzer, Gregory M. "'Iron Dudes and White Savages in Camelot': The Influence of Dime-Novel Sensationalism on Twain's *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*." *American Literary Realism* 27.1 (1994): 42–58. Print.
- Rasmussen, R. Kent. *Critical Companion to Mark Twain: A Literary Reference to His Life and Work*. New York: Facts on File, 2007. Print.
- Roosevelt, Theodore. *The Winning of the West: From the Alleghanies to the Mississippi, 1769–1776*. New York: Putnam's, 1889. Print.
- Slotkin, Richard. *Gunfighter Nation: The Myth of the Frontier in Twentieth-Century America*. Norman: U of Oklahoma P, 1998. Print.
- Stannard, David E. *American Holocaust: The Conquest of the New World*. Oxford: Oxford UP, 1993. Print.
- Stone, Albert E. *The Innocent Eye: Childhood in Mark Twain's Imagination*. New York: Archon, 1970. Print.
- Twain, Mark. *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*. 1889. Ed. Allison R. Ensor. New York: Norton,

1982. Print.
- 『アーサー王宮廷のヤンキー』 大久保博訳 角川書店 2009年
- 『アーサー王宮廷のヤンキー』 龍口直太郎訳 東京創元社 1976年
- . “Huck Finn and Tom Sawyer among the Indians.” *Life* 65.25 (1968): 32-50. Print.
- . *The Innocents Abroad*. 1869. London: Penguin, 2002. Print.
- . *Roughing It*. 1872. Ed. Hamlin Hill. London: Penguin, 1981. Print.
- Williams, Nathaniel. “Frank Reade, Jr., in Cuba: Dime-Novel Technology, U. S. Imperialism, and the ‘American Jules Verne.’” *American Literature* 83.2 (2011): 279-03. Print.
- “Zadoc P. Dederick.” Web. 25 Jan. 2013.
- 野田昌宏 『科学小説神髄 アメリカ SF の源流』 東京創元社 1995年
- 大久保博 「解説」 『アーサー王宮廷のヤンキー』 561-70 頁
- 巽孝之 『恐竜のアメリカ』 筑摩書房 1997年
- 山口ヨシ子 「タイムノヴェルと探偵小説 ヴィクター 『配達されない手紙』 『フィギュア・エイト』」 神奈川大学 『人文研究』 173 (2011): 5-46.
- 和栗了 「もう一人のモーガン Lewis Henry Morgan と *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court* の中の先住民」 京都光華女子大学 『研究紀要』 47 (2009): 1-13.

Technology, Adventure, and U.S. Imperialism in 19th-Century Science Fiction Dime Novels

Yoshiko Yamaguchi

〈Abstract〉

This paper attempts to demonstrate the following: 1) the important role dime novels played in the early history of science fiction; 2) the way late 19th-century science fiction dime novels inflamed American jingoistic nationalism and served to strengthen white male-centered society; and 3) their influence on Mark Twain's novels and stories in dime novels' heyday. These three points will be proved by analyzing Edward S. Ellis's *The Steam Man of the Prairies* (1868), the first science fiction dime novel, together with several works from the Frank Reade Library, the world's first science fiction series in regular publication, as well as Twain's *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court* (1889), which has a 19th-century mechanic protagonist time-travel back to the court of King Arthur.

The Frank Reade Library (1892–1898) was published by Frank Tousey, who was said to have “a flair for the dramatic, the lurid, and the sensational.” It consisted of 191 science fiction dime novels, mostly written by Luis P. Senarens under the pen name “Noname.” Frank Reade and Frank Reade, Jr., the principal characters of these books, appear as wonderful inventors, like Thomas Alva Edison, who represented America's future economic growth. Inventing such novel vehicles as the Steam Man, the Steam Team, and the Electric Air Canoe, these inventor-protagonists make adventurous trips to the American West and other places. Their conquest of indigenous people and monetary success result from such “wonderful” adventures.

Reflecting America's positive attitude toward new technologies and imperialism, these jingoistic dime novels were widely read by young white males, thus helping place white males at the head of society. *Amazing Stories*, the first magazine devoted entirely to science fiction, attained exceptional popularity in 1926. Before this magazine came along, however, the Frank Reade dime novels, as well as such novels as *The Steam Man of the Prairies* and its imitative versions, were best sellers. Often reprinted and very popular, these science fiction dime novels abetted the growth of American nationalism and reinforced the white male-centered social structure. This study also confirms close similarities between these dime novels and Twain's *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*.

Keywords: SF Dime Novel, Edward S. Ellis, *The Steam Man of the Prairies*, The Frank Reade Library, *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*